

<会員の広場>

特別寄稿

イギリス成人教育史研究をめぐる研究者の絆
——宮坂広作教授と E.ウェルチ博士 との交遊の思い出——

上智大学名誉教授 香川 正弘

The Vinculum of the Researchers concerning the British Adult Education History:
Remembrance of the Friendship of Professor Miyasaka Kousaku, Ph.D.,
and Archivist Edwin Welch, Ph.D.

Professor Emeritus of Sophia University
Kagawa Masahiro, Ph.D.

第2回「宮坂広作」学習会
学び続ける・学びを広げる
——諏訪人・宮坂広作の生涯と学問——

第2回「『宮坂広作』学習会」を開催いたします。1日目に「宮坂広作」について学び、2日目には、ご自宅敷地内の三棟のプレハブに収蔵された膨大かつ貴重な蔵書を見学します。見学後に蔵書を好きなだけお持ち帰りいただけますので、特に若い世代の皆様、奮ってご参加ください。なお、当日は大きな袋やダンボール箱をご準備ください。

2019年 **9月16日(月)・17日(火)**

主催：諏訪の風土と宮坂教育学研究会 共催：山梨学院生涯学習センター 後援：諏訪市教育委員会

1日目(9/16:13時~17時) *学習会終了後、懇親会を開催(予定)
場 所：長野県諏訪市文化センター第一集会室(長野県諏訪市湖岸通り5-12-18)

(1) 戦後民主教育推進者としての宮坂広作先生
講 師：伊藤博夫(元長野県高校教諭)

(2) 宮坂広作先生との43年の思い出
講 師：香川正弘(上智大学名誉教授)

コメンテーター：鈴木真理(青山学院大学教授)
司 会：安藤耕己(山形大学准教授)

2日目(9/17:9時~)
宮坂広作文庫見学ツアー
→集合場所等、詳細につきましては、1日目の終了後にご案内いたします

故宮坂広作先生の蔵書を
無償で提供します！

写真1 「宮坂広作」学習会の案内

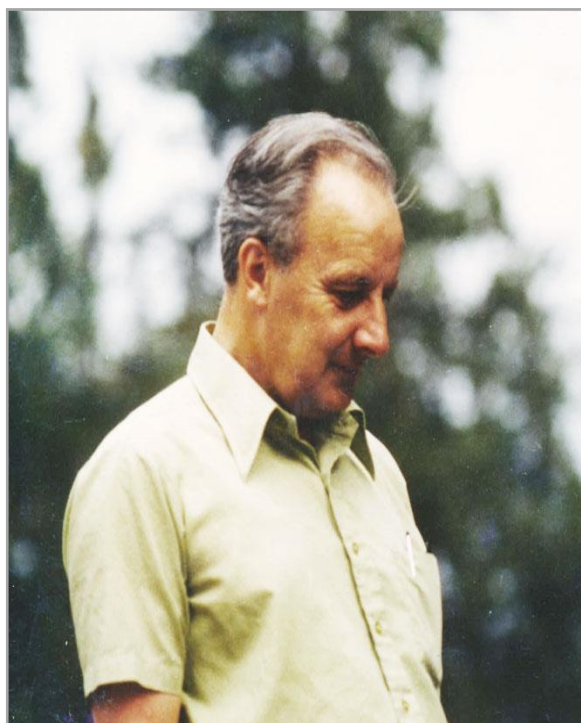


写真2 Archivist Dr. Edwin Welch

<目次>

はじめに

1. 大学拡張運動研究で、2 人の学友を得る
2. 宮坂先生はライフワークを比較成人教育研究に決める
3. 宮坂先生の研究人生は 4 つのステージに分けられる
4. 大学拡張運動の歴史研究へ
 - (1) イギリス大学拡張運動研究での悩み
 - (2) 英米での大学拡張運動に関する資料の蒐集
 - (3) ウェルチ博士の知遇を得る
5. 宮坂先生との研究上の交遊
 - (1) 日本社会教育学会での出会い
 - (2) イギリス成人教育史研究をめぐる論争
 - (3) 先生、在外研究に向けての準備
6. 大学拡張運動の組織的な資料蒐集
 - (1) ケンブリッジ大学図書館アーカイブ
 - (2) オックスフォード大学ボドリアン図書館
 - (3) 労働組合から労働者教育史資料の購求
 - (4) 東京の大学図書館での雑誌論文探索
補遺 大学等図書館アーカイブでの資料点検
- 7 宮坂先生のイギリス労働者教育の研究
 - (1) ノッティンガム大学のクラス授業に参加
 - (2) 労働者教育資料の蒐集
 - (3) 先生の蔵書形見分け
 - (4) 先生のイギリス成人教育史研究

おわりに

The Vinculum of the Researchers concerning the British Adult Education History:
Remembrance of the Friendship of Professor Miyasaka Kousaku, Ph.D.,
and Archivist Edwin Welch, Ph.D.
Professor Emeritus of Sophia University
Kagawa Masahiro, Ph.D.

はじめに

2018 年の 8 月に諏訪の風土と宮坂教育学研究会主催、山梨学院生涯学習センター共催で、「宮坂広作」学習会が開かれるという案内が届いた。この案内を受けて、私はすぐに参加を申し込んだ。本学習会においては、(1) 宮坂朋幸氏による講演で、宮坂広作先生の人となりについて正確な履歴を知ることができた。(2) 相庭和彦氏による「宮坂広作教育学の継承と発展」は、宮坂先生の業績(単行本)を、①教育の歴史的理解、②日本社会の変遷と教育改革、③市民社会の理解、④教育改革論、⑤生涯学習と自己形成、⑥比較成人教育史と日本の社会教育という 6 つのジャンルに分けて、それぞれの問題意識と研究成果を論じられたもので⁽¹⁾、聴講したのも有益

であった。

プログラムには、蔵書の無償配布というイベントもあった。私も先生の遺産分けに与りたく、広島から諏訪まで車で往き、後部座席とトランクにコピーされた資料やパンフレット等を詰め込んで帰った。その後、注意して見なかった文献資料がどうも気になるので、一週間も経たないうちに、再び広島から車で出掛け、前回同様、後部座席とトランクにいっぱい文献資料を積み込んで帰った。小説家や歌人などの文学忌というのは多く開かれているが、学者でそれに似たような形で先生に学ぶ学習会が開かれるのは、珍しいと思う。宮坂先生をよく知る者として、このような会が山梨学院大学やお弟子さん、郷里の人々を中心にして開かれたことはとても嬉しいことであった。

昨年、その第2回目の集まり(2019年9月16-17日)を開くという連絡があり、世話役の宮坂朋幸氏から何か発表してもらえないかという依頼がきた。何を話していいか焦点を絞りにくかったが、私が上智大学を退職するとき宮坂先生が「茫たり交遊四十年」というエッセイを『生涯学習フォーラム』第10巻(2008年3月、183-184頁)に寄稿し、餞の和歌5首をいただいたのを思い出して、「宮坂広作先生との43年の思い出」と題して発表することにした。私の発表の前に、諏訪清陵高校時代の同級生で、元高校の教師であった伊藤博夫氏の「戦後民主教育推進者としての宮坂広作先生」という講演があった。この二つの講演の翌日、また宮坂先生の蔵書分配が催された。この時はJRで広島-諏訪を往復したので蔵書配分に与らなかったが、洋書が気になって11月23日に友人の車に同乗して第3回目の訪問をし、後部座席に文献資料を積んで帰った。

このエッセイでは、第2回で発表した「宮坂広作先生との43年の思い出」の内容を下敷きに、特に宮坂先生(以下、宮坂さんという)とのイギリス研究について思い出すことを、資料にあたりながら書き留めておきたいと思う。宮坂先生のイギリス研究とはということで純粋にアカデミックな論文を作ることもできるが、それでは先生の研究上の苦しみや人間味、さらには親密な交流を通して受けた恩恵も会員に伝えられないので、エッセイの形で書いてみた。

1. 大学拡張運動研究で2人の学友を得る

人生も70歳を越えると「昔懐かし人間」になってしまい、過ぎ去りし自分の人生や、自分の先祖のことなどを振り返ることが多くなった。振り返ってみると、小さいときから人の生涯というのに特に関心が強かったということに気づいた。たぶん、それは私が母から受け継いだ宗教的な感性がそうさせたのではないかと思う。こうした心的傾向があると、研究をするにしても、運動であれ制度であれ、人物を中心にして事象を調べていくことになる。これを自分のことに本格的に向けたのが70歳であった。自分は何者であったのかという問に対しては、内に蓄えられている様々な経験を整理・分析していくことから始めてみた。その時、「人生は劇場である」と捉え、主役を自分において周りの人とのかかわりを見ていくようにしてみた。周りの人は私の人生という舞台に入れ替わり立ち替わり登場しては去って行く。そう見ていくと客観的に自分のこともわかり、相手はこういうことを言っていたのかなど、今まで長年にわたって解けなかったことも回答を見つけて得心することが多々あった。これが70歳まで生きている本当の意味なのかと知った。

社会人として独り立ちするまで、私たちは学校という場で、家族とは違ういろんな先生や友達とも交わって成長する。私が現在あるのは「多くの人たちのお陰です」というが、この表現では人生の質にまで到達しない。人生を通じて基礎基本を教えてくれた人を人生の「恩人」、仕事上で

の肝胆相照らす仲間（私の場合は「学友」）、そして気心が通じる「親友」という3つにわけて、自分のライフステージごとに3人以内で選んでみた。「恩人」と呼べる人はすぐに3人を選べた。恩人は、いずれも私を立志へと導いて下さった方々である。



写真3 河野辰三先生、1981年

最初の先生は河野辰三先生といい元広島高等師範の教授で家のすぐ近くに住んでおられた。近所の噂話で、近くに偉い先生がおられるというので、大学1年生の時から師事して漢学を習った。妹も弟もこの先生の家で習いに行った。次の人は広島大学教養部の余川文彦教授で、個人的にドイツ語を習いながら、文学や生き方などいつも話し相手になっていただいた。

3番目の先生は広大教育学部の社会科教育学の平田嘉三教授である。この先生は京都大学大学院でフランス革命の研究をなさったと聞いていて、歴史研究について議論をしたものである。この3人の先生とも大学時代からお亡くなりになる頃まで親しく教をいただいた。恩師と呼びたいのは、それぞれの先生との親しい交わりを通じて、人生において価値ある生き方を身を以て教えていただいたからである。

本エッセイに関することでは、「学友」が大事である。これもすぐに2人ほど選ぶことができた。ひとりは宮坂広作教授であり、もうひとりはイギリス人のチャールズ・エドウィン・ウェルチ博士 (Dr. Charles Edwin Welch) である。出会った年（その時の私の年齢）、先生のお名前と所属を書いておく。

1971年（28歳）宮坂広作 東京大学教育学部助教授

1972年（29歳）エドウィン・ウェルチ博士 オタワ大学ライブラリー・スクール

多くの大学人と交わってきたなかで、間違いなくこのおふたりを選ぶことができたのはどうしてか。それはフランシス・ベーコンの使う「友」という言い方を当てはめて選んだからである。ベーコンは著名な『随想集』の冒頭に献呈書簡を書いていて、この本をサー・ジョン・コンスタブルに捧げるとした。その理由を彼は次のように説明している。自分と彼との間には、「近い姻戚関係と率直な友情や交際という二つの絆があり、とりわけ研究を知らせ合うという絆があるからです」と説明し、「いつまでもあなたの忠実な弟にして友である フランシス・ベーコン」と自署している⁽²⁾。私もこの説明にあるように常に変わらぬ「率直な友情」と「忠実な交際」を生涯にわたって保った間柄で「研究を知らせ合うという絆」を持った人を「学友」と呼ぶ基準にしたのである。宮坂さんは、私が上智大学退職時の最終講義の案内に対して、健康状態が良くないので

出られないといい、「友へ はなむけに五首」と添え書きし、その一首目に次の和歌を贈って下さった。

四十年の交り長きこの友は 学びの道の縁深かり

「友へ」とか「この友は」というような言葉の使用で、宮坂さんもベーコンが思っていたのと同じような感覚を持って「友」をみておられたのがわかる。

宮坂さんとの絆 (vinculum) については、本エッセイで詳しく述べるので、日本ではほとんど知られていないウェルチ博士 (以下、ウェルチさんという) についても、なぜ「学友」なのかということを書いておく。ウェルチさんは、レスター大学の出身で教会史関係の博士号取得、後にケンブリッジ大学図書館のアーカイヴィストになり、その在職中にケンブリッジの大学拡張資料 100 年分の膨大な文書のそれぞれに書架記号 (shelfmark) を付けて、大学の知的財産として活用できるように整えられる仕事をし、大学のアーカイブにそれらの文書を BEMS (Board of Extra-Mural Studies) コレクションとして納められた。また、それらの原資料を基に、*Peripatetic University : Cambridge Local Lectures 1873-1973* (London: Cambridge University Press, 1973) を出版された。私と知り合ったのは 1972 年のことで、ケンブリッジ大学構外教育部 (Department of Extra-Mural Studies) のディレクター、J.M.Y. アンドルー氏からの紹介による。ウェルチさんは 1972 年にはケンブリッジからオタワ大学に移られ、オタワ市のアーカイヴィストになり、ついでカナダ連邦政府のアーカイヴィストとなってカナダ北部のイエローナイフに移られた。自由時間が多くあって研究ができるというのと、北極をテリトリーとしているので手当が付くというので、イエローナイフに移ったと聞いた覚えがある。

このエッセイを書くためにウェルチさんとの長い期間にわたる交信録を読み返していると、1983 年 3 月 14 日付けの書簡を見つけた。当時、私は佐賀市に新設された国設民営の社会保険センターを運営することに関わっていて、講座プログラムを組むため地元のカトリック教会の神父たちとよく接触していた。佐賀地方はミラノ外国宣教会 (Pontificio Istituto Missioni Estere) に司牧が任されており、イタリア人の優秀な神父が集まっていた。イギリス研究をするには英国教会 (聖公会, Holy Catholic Church) のことがわからないと、英語は訳すことはできても資料を正しく読めない。成人教育運動を行ったリーダーたちは、ほとんどがキリスト教精神を発揮し社会の福音化を目指して実践に入っているし、19 世紀のオックスブリッジの大学人は司祭でもあるからである。したがって、聖書を読んでいることはもちろんのこと、教会の位階制度と教区組織、国教会の中の高教会派、低教会派、広教会派や、プロテスタント諸派の主張の違いなどを理解していることが研究上必要不可欠な基礎知識なのである。宮坂さんも駒場時代には「中寮 20 番の聖書研究会という室に起き臥していた」⁽³⁾ と書いておられるから、キリスト教の勉強はよくされていた。

それはともかくとして、社会保険センターで聖書講座を組むために神父と話していると、そんなに聖書のことを知っていて洗礼を受けないのは問題です、と毎度いわれるようになった。さもありなん、根性が悪いから悪人正機では迫力が足りない、と思い、ついに洗礼を受けることにした。母親は根っからの安芸門徒であるから、「そんなことをしたらご先祖に申し訳ない、第一あ

の世で会えんじゃないの」と絶対反対であったので、出し抜けに洗礼を受けることにした。カトリックでは守護聖人を選んで洗礼名を付けるので、ウェルチさんに、あなたの洗礼名のチャールズをいただいてよろしいかと問いあわせたところ、その返事が3月14日付の書簡に書いてあった。私にはふたつの洗礼名があるが、チャールズは通常使っていない。理由は、チャールズ・ウェルチという非常に高名な歴史学者(1880-1967)がいて、その人と間違われるからだ。それに私の父もチャールズ、祖父、曾祖父も同じ、私の娘はキャロラインという名前だが、それはチャールズの女性名である。そんな説明があり混乱するので使っていないが、どうぞ、といい、愛情深くかつ霊的な手紙をいただいた。こうしてウェルチさんとは、以前にも増してスピリチュアルなつながりもある「学友」になったのである。

2. 宮坂先生はライフワークを比較成人教育研究に決める

宮坂広作先生の学歴については、「宮坂広作」学習会をお世話されている宮坂朋幸氏(大阪商業大学)が次のように報告された。

- >> 1950年4月 東京大学教養学部文科二類入学。
- >> 1954年3月 東京大学教養学部教養学科地域文化研究分科イギリス研究コース卒業。
卒業論文 Herbert Spencer. On the History of Scientific Movements in Education.
- >> 1956年3月 東京大学大学院人文科学研究科 教育行政学専門課程(修士課程)修了。
修士論文題目 明治期における労働者教育の展開。
- >> 1959年3月 同博士課程単位取得中途退学。
- >> 1970年2月 教育学博士号取得(東京大学) 博士論文題目 近代日本社会教育史の研究。

宮坂さんの学歴から、先生の生涯を貫く関心をうかがうことができる。

先生の最初の研究関心について、宮坂広作著作集の『英国成人教育史の研究』ⅠとⅡ(明石書店、1996年)の「あとがき」に次のように書かれている。

そもそも筆者がイギリスの成人教育史というより、労働者教育史に興味をもったのは、教養学部教養学科のイギリス分科に学んでいたときであった。それ以前、イギリスという国に関心を抱いたのは、この国が世界でもっとも早く近代化議会制民主主義と資本主義経済体制を実現した国であり、いままた資本主義の諸矛盾を克服すべく、「福祉国家」の実現を目指して着々と成果をあげていると考えたからである。王室があるような国で、社会主義＝労働党の政権が成立するというのは、なぜ可能なのだろうかと不審に思ったものである。

イギリス社会の歴史を少し勉強してみると、産業革命の栄光と悲慘が認識でき、19世紀に労働者階級が置かれていた状況のすさまじさに衝撃をうけた。そして、そのような抑圧と貧窮のもとで、自己の階級の社会的解放のために立ちあがった人びとの存在に感銘をおぼえた。さらに、貧困な民衆の生活と文化を向上させるために力を尽くした宗教者や知識人がいたことを知り、その人びとの良心と知性にこころうたれるところがあった。教養学科在学中に力を入れて読んだのは、ロバート・オウエンの著作や伝記であり、併せて社会思想関係の文献に努めて接するようにした。教育学部の勝田教授がオウエン

の A New View of Society（『新社会観』）をテキストにしたゼミを開いておられたので、駒場から毎週参加することにした。

勝田教授の重厚でかつ温かいお人柄に魅かれるところ大であったが、イギリスの労働者教育史を専攻しようという志向がつよかったので、大学院進学にあたっては、宮原誠一教授の社会教育学研究室を選んだ。しかし教授のテーマも近代日本の社会教育史になった。大学の教員になってから、イギリス成人教育史につねに関心をもちつづけ、自分のライフワークは日英の比較成人教育史研究だと意識していた。最大のネックは史料の蒐集であった。現在の状況とは違って、当時はブリティッシュ・カウンシルを通してイギリスからとりよせるしか方法がなかった。⁽⁴⁾

この文章から、宮坂さんのイギリス成人教育研究への関心は、イギリスの先進的事例に学んで我が国の社会教育を考えるための研究というよりも、イギリスの成人教育史に内在する、労働者等抑圧された民衆の知性を向上させていくという、労働者教育の原理と方法を解明しようとすることにあったことがわかる。宮坂さんは、『研究Ⅱ』の「あとがき」の冒頭において、次のようなことを書かれている。

イギリス成人教育史の研究は、大学院進学時の初志であり、本来ならこの分野の研究に生涯専念すべきであった。もしそれができていれば本書の水準を超える仕事ができただろうかもしれないという気持ちが、ふと胸底をよぎることがある。⁽⁵⁾

この述懐を読むと、才気溢れる宮坂さんが生涯を通じてイギリスの成人教育史を追究したかったが、それができなかったことについての無念な気持ちが伝わってくる。先生がイギリス研究に専心することができるようになるのは、50歳まで待たなければならなかった。50歳までに初志を抱いたままでおられたというのは不遇というべきかと思う。宮坂さんは初志の課題に取り組むための準備をどのようにされたのか、50歳から60歳過ぎまでのイギリス成人教育史研究の成果はどのように評価されるか、初志が果たされた後はどのような生涯学習観に達せられたのか、こうしたことを、私たちの交際から見てみたい。

3. 宮坂さんの研究人生は4つのステージに分けられる

宮坂さんの学研生活は、大学へ入学された1950年から他界された2010年までとすると、ざっと60年と算する。この60年を振り返っての和歌に次のような歌がある。

2010年3月－10月帰天までの病中の歌

いばらなす まなびのみちをあゆみきて 六十年は久しかりけり

宮坂さんの学びは大学入学から本格化するが、学問への取り組みは大学院へ進学されてからであると考え、1954年から始まるとみられる。先生は、60年に及ぶ学研生活を「いばらなす」と表現された。私が宮坂さんの面識を得たのは1971年のことであるが、この時から後のことは実地に見てきており、「いばらなす」と表現されるように、社会教育の分野を開拓していくことで大変な辛苦をなされたのを知っている。イギリス研究をしたいと思っても国内には基

本的な文献資料がない、歴史研究の在り方はわかっているけども原資料を使って研究する人は身の周りにはいないではないか、史資料も国内で得られないのにどのようにすれば切り拓いていけるのか、それにしても当面は社会教育を学問にするために未開の荒野から発掘していかなければならない。加えて、社会教育研究者の傾向として「出身大学・所属大学・イデオロギーなどのちがいにともづく学閥・学派の対立が生じやすい」⁽⁶⁾ということもあった。これらのことが宮坂さんには「いばら」であった。徒党を組むのを好まず、学問の立場から発言する宮坂さんにとっては、日常的な「いばら」が行く手に広がっていたのである。

宮坂さんは、生涯にわたって多くの著作を残された。単行本については相庭和彦氏がすでに発表されている。単行本は社会的課題に応えるといういわば評論的な内容が多くあり、社会教育活動の対象をギリギリに攻めて行く研究は、大学や学会で刊行される研究誌に載せられることが多かった。本エッセイでは、先生の研究生活でのイギリス研究を取りあげているので、生涯にわたってイギリス成人教育史研究がどのように発展していったかを、便宜的に4つの時期に区分してみた。

宮坂さんの人生における研究活動の第1期は、東京大学教養学部を卒業、次いで大学院の博士課程単位取得中途退学するまでの時期にあたる。学部時代に勝田教授の授業でオウエンを学び、イギリスの成人教育に関心を深めていて、最初の論文は教養学科イギリス分科に提出した、**Herbert Spencer. On the History of Scientific Movements in Education** という卒論(1954年)であった⁽⁷⁾。大学院に進学するに際しては、個人的に惹かれていた宮原誠一教授に師事することを決め⁽⁸⁾、研究としてはイギリスの労働者教育を研究するつもりであったという。宮原ゼミの研究は日本の社会教育史に関心が限定されていたので、本来の問題意識を活かして、場を日本に、時期を同時代の明治期に設定して労働者教育を問題にする修士論文を作成した。1950年代後半は、宮原ゼミでは農村サークルについてのフィールドワークと、近代日本社会教育史の資料蒐集が行われた。宮坂さんによれば、宮原教授は浜田陽太郎氏との対談のなかで、近代日本社会教育史をゼミのテーマに据えられた理由を次のように説明されている。

なにしろ、ご承知のように社会教育の研究というのはあまり戦前の蓄積がないんですね。戦前の教化運動的な社会教育のなかからは、多少とも学問的な研究といえるほどのものはなかなかない。そこで、第一歩からやり直さなくてはいけない、研究と歴史だ、日本の近代の社会教育の歴史、明治以来の社会教育の歴史を、資本主義の典型的に発達したイギリスの成人教育との比較研究でやってみよう、と。⁽⁹⁾

宮坂さんはこの近代日本社会教育史の研究の方に関心を抱き、その時の楽しみを次のように書いておられる。

発見・創造の喜びがあまり感じられなかった農村ゼミに比べ、近代日本社会教育史研究の方は、生産的だという感じがした。資料は主に東大の明治大正新聞雑誌文庫で探したのだが、一生けんめい探索すると、いろいろな資料が出てきて、当時はほとんど空白だった近代日本社会教育史の骨格が、しだいにはっきりと浮かびあがってくるのは楽しみだった。朝から晩まで文庫に閉じこもって、つぎからつぎと雑誌のページをめくり、興味ある記事を発見する

とすぐノートをとるという、単調な作業ではあったが、努力すると確実に資料が溜まっていくことを喜び、勤勉に学習した。⁽¹⁰⁾

ここには注目すべきことが書かれている。ひとつは日本の社会教育の基礎研究はこのような作業から始まったということ、すなわち社会教育の歴史実態を把握するために雑誌からデータを拾っていくことが行われたということである。

他方、宮坂さんはイギリス成人教育史を研究したいと思っておられたので、近代日本社会教育史研究のためにも、歴史研究の実際的な方法論を学びたいと思っておられた。このことについては、大学院時代の授業を振り返って次のように書かれている。

ゼミでは各院生が探索の成果を発表しあい、お互いの知見をゆたかにしたが、先生から資料の解釈や評価について積極的な発言があったようには憶えていない。歴史研究の方法についてうかがったこともない。もっとも、海後宗臣先生の教育史ゼミにも出席していたが、こちらの方でもとにかく方法論的に目ざましい教授があったわけではない。当時教育史研究では、海後勝雄氏をリーダーとする唯物史観ふうの研究グループがブリアントな存在であったが、大学院のゼミでそれが話題になったことはないと思う。⁽¹¹⁾

また、社会教育講座の歴史的研究についても、次のようなことを述べられている。

宮原・碓井両教授の社会教育史は単なる実証史ではなく、社会教育の発展法則—発展をもたらす要因と発達段階—を明らかにしようとするものであった。既成の英国の成人教育史家のような過去のディテイルを正確に復元することに甘んじようとする歴史などとは質的に異にする。⁽¹²⁾

「英国社会思想史を学ぶことを最大の目的」⁽¹³⁾ にしてイギリス分科に進学し、教育学とは異なる社会科学のディシプリンを受けておられた宮坂さんは、教育学部の歴史研究の方法論意識の欠如には戸惑われた様子がよくわかる。宮坂さんは大学院の5年間を総括して、「不完全燃焼であったような気がする」、「これ以上残ってみてもあまり進歩は望めないように思えて、そこで退学することにした」⁽¹⁴⁾ という。

また、方法論に関連しては次のようなことも宮坂さんには課題であった。宮原誠一教授は、社会教育の歴史的理解という観点を強調し、学校教育との対比のうえで社会教育を「補足」「拡張」「以外」の教育として捉えておられた⁽¹⁵⁾ ので、宮原教授の愛弟子である宮坂さんたちは、「近代社会教育の成立と発展に関する宮原テーゼの実証」をめざして研究に取り組んだ⁽¹⁶⁾。宮原テーゼの「拡張」について橋口菊は、「学教教育の拡張としての社会教育は、一つにはイギリスにその典型をみせたような、「大学拡張」(University extension)、すなわち高等教育の開放の意味がある」⁽¹⁷⁾ と述べている。このように書かれていると、イギリスの大学拡張とはどういうことなのかを研究しないと、「拡張」の仮説をいつまでたっても説明できないことになる。このような「不完全燃焼」の精神状態や、歴史的に証明しなければならない課題を抱えているので、若い時の宮坂さんの研究上の悩みは深かったと言わざるを得ない。

第2期は、大学院から社会人になられ、高校での非常勤、駒澤大学、東洋英和短大を経て1962年にお茶の水女子大学の講師に、1970年に東京大学の助教授に、そして1979年に教授になられるまでの時期である。この時期には、宮原ゼミで取り組んだ日本社会教育史の研究を独自にまとめることと、実践的・現代的な教育問題の解決を追究しつつ、それを社会教育の体系の中に位置づける仕事をされた。この時期の前半は日本の社会教育史研究に本格的に取り組まれ、その成果を『近代日本社会教育政策史』（国土社、1966年）と、『近代日本社会教育史の研究』（法政大学出版局、1968年）として出版する。後者の大著は1970年に東京大学から教育学の博士学位論文として認められたものである。この両書は、わが国に社会教育学を確立するという画期的な業績となった。私ら後学で社会教育の分野の研究を志す者は、上記の大著2冊を精読して社会教育の研究に入ったのである。

宮坂さんの主著『近代日本社会教育史の研究』では、イギリス成人教育史の知見が次の箇所に少しうかがえる。すなわち、3部第4章の翻訳的社会教育論と、第7章の民間社会教育論の箇所である。社会教育は社会教育法の範囲で論じられがちであるとき、宮坂さんが民間で展開された自由大学運動を社会教育史の中に取り込まれたのは、新しい社会教育の発想であった。大人の自主的な学習では、民間での自由な学習こそ大事であるという発想がこの時点でもみられる。

また、わが国の社会教育史を知るほどに、宮坂さんはイギリスの成人教育との関係で考え込まれるようにもなった。そのことを述べた記述がある。

英国の状況と日本の場合を比較すると、そのギャップは目も当てられないほどである。第二次世界大戦までのところと言えば、彼我の差は一世紀分にも達しただろう。否、数値で示せるような差ではなく、社会構造そのものの質的な差異に基づくものであった。大正期の日本の社会教育は、近代日本の社会教育史の上でもっとも進歩的なものであったが、その多くは歐米、とくに英国の成人教育を模倣するものであった。それも、原理・理念・本質の模倣ではなく、形態上での真似事にすぎなかった。とくに政府の実施した事業、たとえば「労務者教育」とか「補導学級」とか呼ばれたものは、まったく以て非なる性格をもっていた。そういう中で、労働組合をバックにつくられた日本労働学校などは、比較的にイギリスの原型と共通する性格を有していた。日本のばあい、労働組合の担い手養成という実用的な目的が明確であり、イギリスのばあいのように、真理探究とか高度な教養の修得といった、リベラル・アーツ志向は弱かった。⁽¹⁸⁾

イギリスでは1960年前後に、1600年から続いてきた長い成人教育の歴史を、次の3人の研究者、すなわちロバート・ピアーズ(1958年)、トマス・ケリー(1962年)、J.F.C.ハリソン(1963年)が、それぞれ独自に成人教育史の単行本にして出版した⁽¹⁹⁾。これらの研究書は、宮坂さんが『近代日本社会教育史の研究』を執筆中の時期に出版された。宮坂さんはピアーズの名著 *Adult Education* を新婚時代に大枚をはたいて購入した⁽²⁰⁾と書いておられるから、この本でイギリス成人教育史の流れと特質を理解されたのだと思う。1960年代に日英ともに成人教育史がまとめられたということも注目されることである。

また、宮坂さんと私との間にも交流が始まったのもこの時期である。私との交流が始まったと

いうことは、イギリス歴史学者のウェルチさんとも繋がったことになる。このことは宮坂さんにとって大きな転機になるので、後に述べることにする。

第3期は、1980年に在外研究でノッティンガム大学へ留学され、帰国してから本格的にイギリス成人教育史研究に励まれ、『英国成人教育史の研究』（1996年）を刊行された時までである。ノッティンガム大学は、1881年に、ケンブリッジの大学拡張講座から市民大学に発達した。同大学には1922年にロバート・ピアーズが世界で最初の成人教育の教授に就任し、その後も成人教育の教授に歴代優れた人材を得て、1980年頃は成人教育の分野で最も研究・実践において先進的な大学となっていた。日本でもその名声は高く、1936年には文部省がピアーズ著の『英国ノッティンガム大学に於ける成人教育十五年』（社会教育叢書第33輯）を翻訳出版しているし、東京大学の社会教育学講座の初代教授宮原誠一先生は1963年に半年間文部省在外研究員でノッティンガム大学に滞在された。第2代教授の碓井正久先生も1971年に在学研究でドイツ・イギリスに行かれ、1972年の2月にはノッティンガムに寄っている。⁽²¹⁾ 第3代教授の宮坂さんは1980年に在外研究でこの大学に赴き、続いて京都大学の上杉孝實教授が1982年に在外研究された大学であった⁽²²⁾。宮坂さんの初志は、イギリス成人教育史にあったので、松原教授から譲られた在学研究の機会を得られて、宿願を果たすべく、迷わずノッティンガム大学を選択した。

ノッティンガム大学での研究生活については、幾つか書かれた記事がある。『額の汗を野にそそぎ』には、簡単ではあるが次のように書かれている。

ここ数年研究上で交流のあったノッティンガム大学の research fellow にしてもらって、学生寮(Residential hall)のテューター用の室に住み込んだ。学寮には、男子学生寮・女子学生寮・男女混住寮（同棲寮ではない）の三種類があるのだが、筆者には女子学生寮が割り当てられ、百五〇人ばかりの女子学生の中の唯一の男性として暮らすことになった。以前、日本の女子大学の教師を一〇年ばかり勤めたことはあるものの、異国の若い女子学生たちの中での寮生活は、予想もしないできごとの連続であった。

さて、かんじんの研究生活の方は、実に幸せであった。これまで長年いくら手を尽くしても入手できなかった原資料が、大学の内外にころがっていた。成人教育を研究している Colleagues は、たいへん親切で、筆者のどんな愚問にも懇切に答えてくれて、なにかと心を配ってくれた。一見ひどく冷淡で、取りつくしまもないような感じでいながら、いったん頼まれれば一肌も二肌もぬぐという英国人氣質をのみこむまでは、有色人種に対する偏見でももっているのではないかと、憤慨したことも何度かあった。⁽²²⁾

宮坂さんは、大学院のディプロマ・コースのゼミにも出席され、成人教育の実践者と机を並べて勉強された。それ以外の時間は、パブにも行かず、先生が最も関心のあるイギリス労働者教育史の資料と、今後若い人がイギリスの成人教育史関係で博士論文が作れるように資料蒐集に集中し、在英中の全資金を投入された。資料蒐集では、ノッティンガム大学以外にも全英に足を延ばされ、第1次資料やパンフレットを蒐集された。クラス授業の様子や資料蒐集の動きについては、『英国成人教育史の研究 I』の「あとがき」や「生涯学習の遺産発掘と生涯発達史研究」に生き生きと描かれている。

宮坂さんのイギリス研究は、渡英までには「イギリスにおける大学成人教育の展開」宮坂広作編『生涯教育と高等成人教育』No.1（文部省科学研究報告書、1978年）以外には一本の論文もなかったが、在学研究後には15年かけて9本の本格的なイギリス研究を発表され、それらをまとめて『英国成人教育史の研究』のⅠとⅡとして刊行された。どの論文も優れているが、W.E.A.の創立者である「アルバート・マンスブリッジ論」、「ラスキン・カレッジでの学生の叛乱」、そして「英国協同組合運動」は、イギリス人の研究水準を超えており、その研究成果を活かして比較成人教育学に応用できる内容であった。ひとりの社会教育学者が、2カ国それぞれの成人教育史を著作されたというのも、前代未聞の偉業である。

第4期は、1992年から2010年にかけての晩年の時期である。この時期は1992年、東京大学を定年退職して山梨学院大学法学部教授になられた時から、2009年「生涯学習と自己形成」（『大学改革と生涯学習』13（2009年3月））という論文を発表された時までである。東京大学を退官されて郷里に帰られたとき、4月5日に、宮坂さんは御母堂を喪われた。そして、1992年に母上にきのさんを追悼して編著された『額の汗を野にそそぎ——父母の記』を刊行された。この書名は、旧制高校寮歌の「藝文の花」（明治43年）の4番の次の歌詞から採用されたものである。宮坂さんの説明は次の通り。

母からの、そして父からの最大の贈りものは、勤勉な生きかたに対する共感である。父や母とイデオロギー論争をしていた青年期に、筆者が愛唱していた旧制高校寮歌の一節に、「などか恐れん諸共にいざ戦はん我父は 額の汗を野にそそぎ 我が兄はまた舟に乗り 勇魚とるべく行く見れば 戦ならぬものやある」というのがある。筆者はこれを労働歌に見立てて口ずさみ、戦闘的な人生観を培ってくれた母に対する慕情をこの歌に託していたのである。⁽²⁴⁾

本書はその副題が示すように「父母の記」でもあって、両親それぞれの自己形成、又両親とのかかわりでの人間形成、年老いた両親との対話、あわせて寛永19年（1642年）に新田の開拓で入郷した草分け5軒のひとつである宮坂家の跡取りとして一族の話などが書かれている。ここで宮坂さんは、両親の自己形成と自分との関係をまとめて、生涯学習に新しい見地を開かれた。それは次のところにある。

筆者の専門は社会教育学であるが、この学問のめざすところは、ふつうの民衆が生活過程で自分の意識をどう変えていくかの解明である。名士・偉人ではない、ごくふつうの市民・庶民の生活と意識の問題を、自己形成・自己変革という角度から見ていこうとするのである。⁽²⁵⁾

筆者はいま社会教育学を専攻している。労働者・農民・市民の意識形成と意識変革の問題をフォローするのが、この学問のテーマである。⁽²⁶⁾

宮坂さんのこの考えに基づくライフ・ヒストリーの著作は、おそらく「亡父母の鎮魂のために刊行した小冊子も、庶民を取りあげた記述ということになる」⁽²⁷⁾と述べておられることからし

て、『額の汗を野にそそぎ』がその嚆矢となったと思われる。そして、また、この学説は、歴史上での社会教育活動の発掘、社会的課題となる教育問題、そして本来研究しなかったイギリス労働者教育といった研究遍歴を経て到達した生涯学習の研究テーマであった。その後は、和合恒男（東大文学部卒、農本主義塾風教育）、北川省一（東大文学部中退、良寛研究者）、折井一（東大工学部、陸軍技術将校、工業高校長）⁽²⁸⁾、また『生涯学習フォーラム』（紀尾井生涯学習研究会刊）には、「生涯と自己形成」という題で「平塚らいてふ」（第6巻第1号）、「近藤真柄・帯刀貞代」（第7巻）、「捨玉得玉——飯島宗一」（第10巻）を書かれた。

以上、宮坂さんの研究生活を4期に分けて簡単に説明した。このように書いてみると、第1期は社会教育研究のディシプリンの修得期、第2期は日本社会教育史研究の構築期、第3期はイギリス労働者教育史づくり期、第4期は人の生涯を通しての自己形成を研究する時期というように概括できるかもしれない。宮坂さんの研究生活は、見事に起承転結がきいていると思えるが、そこには、宮坂さんの初志、すなわち学問に志したときのイギリス成人教育史研究への問題関心から発する学識が生涯にわたっての研究人生を貫いているとみれる。

4. 大学拡張運動の歴史研究へ

宮坂さんと私との最初の出会いは1969年の金沢大学で開かれた日本社会教育学会での発表であったが、実際に知己を得たのは1971年の山形大学での学会からであった。その時の宮坂さんの感想が残っていて、私の発表が原資料を使って研究をしているというのでずいぶん驚かれた様子書かれている。私の方は、イギリス研究にそんなに関心のある大学人がいるとも知らなかったが、宮坂先生の方は、これぞ求めていたイギリス研究者だと思われたようであった。では、なにが宮坂先生の関心を引きつけたのか、2人の出会いを述べる前に、すこし私の大学拡張運動研究についての述べることにしたい。

(1) イギリス大学拡張運動研究での悩み

宮坂さんと私とは、年齢が11歳も違い、しかも育った場所は先生は長野の山の中（海拔千^{メートル}）、私は広島の下町で生まれ、育ったところは海拔50^{メートル}、先生は長い4^{キロ}の急坂を下って高校へ通い、そして難関の東京大学へ、こちらは自宅から300^{メートル}ぐらい離れた公立高校を出て、距離約2^{キロ}弱ぐらいしか離れておらず、そんなに勉強しなくても入れる広島大学に通った。このように世代、郷土、学閥の違うふたりがどうして終生の学友になれたのかは、誰しも興味のあるところであろう。宮坂さんは63歳のとき過去の交際を振り返り、「われわれは私利私欲の一致で仲良くしようとしたのではなく、研究上の誠実という点で相互に尊敬しあえたから、時には争いながらも今日まで交遊をつづけたのであろう」⁽²⁹⁾と述べられている。私もこの言葉に同感である。宮坂さんは、歴史研究はこうあるべきだ、と言われても、「論文を媒介にしない方法論議ほど非生産的なものはない」⁽³⁰⁾、実物を見ないことにゃ、そういうあなたの論文を見せて下さい、と研究方法論で混迷を深められていた時期が続いていた。わが国にも渡英留学した社会教育学者は何人もいたが、そうした大学人の著作をまったく評価されなかった。他方、私の場合もまったく同じ時期に同じように悩んでいたが、違ったのは、一足早くその混迷から脱したことにある。それが可能であったのは、私は宮坂さんとは違い、地方都市にいて自分の研究だけに集中していたからである。私の研究での悩みと脱却を理解しないと、宮坂さんと私の研究上の絆がどうしてでき

たかも理解できないと思うので、私の大学院時代のことを少し述べさせてもらうことにする。

私が大学院に進学して、イギリスの大学拡張運動を研究対象にし、その成立史を研究するようになったことについては、既に論文で発表している⁽³¹⁾ので、ここでは宮坂さんのことに関連することを書いておく。私は広島大学大学院教育行政学専攻で教育経営学という講座に所属していた。この講座は学校教育と社会教育のそれぞれの経営 (administration) 研究することをめざした講座で、研究室の共同研究のテーマは学校経営におかれていた。1966 年頃はまだわが国では大学拡張 (university extension) は大学においても行われておらず、社会教育を研究するのなら青年団とか公民館とかではないかといわれた時代であった。宮坂さんもあるところで次のように書いておられた。「日本の大学は戦後社会教育史の中で、ほとんど存在感をもちえなかったのである」
「日本の社会教育は、市町村レベルで、公民館という施設が専ら担い、戦後まもなくは農業・農民教育もおこなったが、やがて「趣味・教養」が主な教育内容となった」⁽³²⁾と。私の両親は共に師範学校出の小学校教師で、子供の教育を天職にした人であった。私は「二十四の瞳」に似たような教師の家で育ったが、教師のもつ社会的な幼さにはうんざりするところがあり、教育を研究するなら学校以外のことと決めていたので、必然的に社会教育を専攻することになった。社会教育の分野で研究をすることを決めた時に、少し勉強してみた結果、ここに宮坂さんが書かれているのとまったく同じような感想をもっていた。地域網羅主義で団体を組織し、趣味を教養といい、生活改善を内容とし思想善導をしようとする社会教育に反発し、われわれ学生が享受している大学教育のような知的学習を社会に広めていく必要があるという問題意識から、私は大学拡張を研究対象に選んだ。そのおり、まだわが国では大学拡張とか大学開放という問題意識は希薄であったので、大学拡張の本来の意味を知りたくて、アメリカをざっと外観して、その起源がイギリスにあることからイギリスの大学拡張を解明することにし、修士論文は、「英国大学拡張運動の初期形態」(1867-1903)と届けて歴史的に研究することになった。

さて、私の大学院時代を思い起こしても、研究のディシプリンでは、学校経営を研究する方法論は時に議論されることはあっても、歴史的研究の方法についての議論はまったくなかった。主任教授は歴史研究を好まなかったしイギリス嫌いであったから、対立することが多かった。西洋教育史の教授の授業にも出たが、歴史研究の方法の話はなかった。このことは宮坂さんの大学院時代と同じ状況であったということである。違ったのは、西洋教育史の研究室には H. ラシュドール著『大学の起源』(上中下、東洋館出版社、1966-1968 年)を訳出された横尾壮英先生がおられ、西洋の大学史の文献がたくさん集められていたこと、グルントヴィ研究に没頭した佐々木正治氏が同じ研究室の助手であったこと、加えて英仏独の教育や大学史を研究する院生仲間が多くいたという環境は、学問研究をするのに良かった。また在学中は、大学拡張運動の発生史にどのような現代的な意味があるのかと批判されることが多く、これでもよく鍛えられた。

修士論文の作成段階で、なにがイギリスの大学拡張運動史の基本テキストであるか、また、どんな文献があるかについて意見を聴ける人がいなかったもので、文献サーヴェイをこつこつ始めることにした。その第 1 は、広島大学の教育学科図書室、名古屋大学・東京大学の教育学部図書室、早稲田大学の図書館、国立国会図書館、ブリティッシュ・カウンシルの図書室で、イギリスの成人教育と大学拡張の文献がどれくらい所蔵してあるかを調べた。第 2 は、先行研究者を先達として

訪ねた。加藤克子氏（東大院生）や加藤幸次氏（名古屋大学院生）を自宅に訪ねて蔵書も見せてもらい、それぞれの文献がどのような意味を持つかを解説してもらった。後述する東大の総合図書館の地下にイギリスの雑誌が蔵書されていることは、加藤克子氏からこの時に教えてもらったことである。第3は上野図書館での探索で、19世紀の英米の大学拡張運動や女性高等教育運動、技術教育関係の文献をたくさん見つけることができた。文献サーヴェイは大学拡張運動をどのような文脈で理解するかによって調べる範囲が変わってくる。明治政府は近代国家を建設していくとき、イギリスを成熟した市民社会の国と見て、行政資料のみならず社会運動や教育運動の資料も多く集書していることを知ることができた。第4は、国会図書館の大英図書館の蔵書カタログを見て、大学拡張運動の主要な推進者であるジェイムズ・スチュアート等の講演録等のリストを作り、それらの複写を直接個人的に集め、これらの文献資料を使って修士論文を書くことができた。

博士課程に進学してから半年間はとても憂鬱であった。ひとつには、修士論文のどこに独創性があるのかという疑問が湧いてきたことである。自問自答の結果、第2次文献に依拠して要領よくまとめたに過ぎないということを知った。イギリスの研究者がこの論文をどのように評価するかというのを知りたかった。修士時代は習作時代ではあるが、それを脱却していくのが大きな課題となった。もう一つは、論文作成上、大学拡張運動の年代記を作っていたとき、ひとつの歴史的事象が著書によって違う年になっているということを8カ所ほど見つけていたことである。たとえば、大学において成人教育の専任フェローになった最初の人にはW.H.ショー師（Rev. William Hudson Shaw）であったが、この人事については、次のように3つの違う記述が見つかった。その文章を出典とともに下に記載しておく。

- ① '1887 Committee formed to collect endowment fund for 'University Extension Fellowships'. Rev. W. Hudson Shaw nominated at the first Endowed Lecturer by the Oxford Delegacy(cf. Report published by the Clarendon Press, 1887)'. William H. Draper, *University Extension: A Study of Fifty Years 1873-1923* (Cambridge University Press, 1923), p. 121.
- ② 'W. Hudson Shaw, who was appointed as an "Endowed Lecturer" under Cambridge in 1877, was the first.' Thomas Kelly, *Outside the Walls: Sixty Years of University Extension at Manchester 1886-1946* (Manchester University Press, 1950), p. 33 n.3.
- ③ 'In 1886 Oxford appointed Hudson Shaw as an 'endowed lecturer', with a guaranteed minimum income of £ 350 per annum'. Thomas Kelly, *A History of Adult Education in Great Britain* (Liverpool University Press, 1962), p. 235.

この3つの引用文はショー師が専任フェローになったことを叙述しているが、①は1887年にオックスフォードが任命、②1877年にケンブリッジが任命、③1886年にオックスフォードが任命と書かれている。この違いを知って、私にはどれが正しい記述であるか判断のしようがなかった。①が正しいことがわかったのは、オックスフォードから大学拡張の報告書を取得した1972年頃のことであった。⁽³³⁾ 修士論文の自己批判から、資料批判が常に必要であること、第1次資料に基づいて研究しなければならないこと、事実を確定して解釈をすること、そして全体として歴史的研究を歴史研究に変えていくことが必要であることを学ぶことになった。また、研究の内容も、大学拡張の理念の形成（運動）と、その理念を顕現していく運営組織化の原則、すなわち

大学拡張講座の組織化と、そして中央・地方における拡張運動の組織化、という3つの分野で主題を追究するというのも自ら決めた。理念の形成では、「大学拡張の父」と称されるジェイムズ・スチュアート、及びスチュアートに受け継がれてきた17世紀からの大学拡張的理念の継承を問題とすること、組織化では、講座の定型化を大学教育の側からアプローチすることを研究の中心に据え、こうした知的学びが、ベーコンの『学問の進歩』(1605年)によって示された知識革命の提唱⁽³⁴⁾以来、最終的には、イギリスの国民文化として受け入れられてきたことを研究したいこととして設定したものである。

大学拡張がイギリスの国民文化のひとつとして受容されてきたとみるならば、大学拡張は単なる成人教育の問題ではなく、教派や階級といった価値観の主張による葛藤という社会的、文化的なコンテキストの中で捉えることが必要になる。このような研究方針を立てたので、目が国内から転じて英米の図書館所蔵の文献に向かうようになった。以後、75歳を過ぎるまで、古典的な大学拡張運動やその応用問題などの研究では、このときに考えた態度で研究を行ってきた。若い時に苦しんで設定した研究方針や研究計画は生涯を支配するもので、宮坂さんも私も同じような経験をされたことになる。半年間の苦しみを経て研究の方向が決まったので、博士1年の冬頃(1968年)から本格的に海外の大学拡張運動の資料を蒐集することを始めた。それは個人で大学拡張コレクションを作ることをめざして、47歳(1990年)ぐらいまで継続的に続くことになった。世の中にはいろんな趣味を持っている人がいる。浮世絵を集める人もいれば、自動車の模型を集める人もいるし、家を作ろうと計画を立てる人も多い。よし、それなら私は大学拡張資料のコレクションを作ろう、そんな気持ちで大事業に乗り出した。

(2) 英米での大学拡張運動に関する資料の蒐集

私自身の大学拡張研究のことをもう少し説明しておきたい。ここでは、大学拡張に関する先進的な研究情報取得と原資料の蒐集活動について、修士論文提出の1968年以降から1973年ぐらいまでの期間に限定して述べることにする。この期間は博士課程の学生、助手1年、就職待ちの研究生2年、就職1年目で、自由な研究時間が多くあった。資料蒐集に限定して述べるに際し、なにも目安がないのではどのような努力をして原資料を入手したかわからないであろうから、1972年に日本社会教育学会紀要に載った「英国大学拡張組織の研究」(1972年論文と称す)と、1974年に『世界教育史大系 36 社会教育史 1』に載った「19世紀イギリス大学拡張の地方組織」(1974年論文と称す)という2つの論文で引用した文献を以下に示し、それらの文献資料をどこから取得したかを説明したい。なお1974年論文は、学会発表の後、福尾武彦氏から電話があり、現在編集集中の梅根悟監修『世界教育史大系 36 社会教育史 1』(講談社、1974年)に大学拡張の論文を書くようにという要請があったので、「19世紀英国大学拡張の地方組織」と題した論文を提出し、同書に特殊研究2として掲載されたものである。2つの論文が刊行されるのに2年の隔たりがあるが、その原稿提出は1973年までに済んでいるので、ひと続きの論文と考えてもらって差し支えない。文献名の末尾にある括弧内は、その文献を所蔵している大学や図書館名である。

○1972年論文の引用文献

第1次資料

Report of the Royal Commissioners Appointed to Inquire Whether Any and What Kind of New University of Powers Is or Are Required for the Advancement of Higher Education in London, 1889. (London University Library)

Moulton, R.G., *Address on the University Extension Movement*, 1890. (British Library)

Macan, H., *The Duty of the State towards Higher Education*, 1890. (上野図書館)

Moulton, R.G., *University Extension and the University of Future*, 1891. (British Library)

Stuart, J., *An Inaugural Address, delivered at the Opening of the Third Series of Vacation Courses of Study at Cambridge, July 26, 1892.* (British Library)

第2次文献資料A(大学拡張指導者の著作)

Moulton, R.G., *University Extension Movement*, 1886. (British Library)

Mackinder, H.J. and M.E. Sadler, *University Extension, Has It a Future?* 1890. (Bodleian Library, Oxford)

Roberts, R.D., *Eighteen Years of University Extension*, 1891. (東京図書館 明治25年1月11日購求印)

Wenley, W.H., *The University Extension Movement in Scotland*, 1895. (St. Andrews University Library)

Reason, W., *University and Settlement*, 1898 (British Library)

Draper, W.H., *University Extension: A Survey of Fifty Years 1891-1923, 1923.* (早稲田大学図書館印).

第2次文献資料B(研究者の著作)

Kelly, T., *Outside the Walls*, 1950.

Rewly House Papers, 1954-55. (Bodleian Library, Oxford). [partially]

Kelly, T., *A History of Adult Education in Great Britain*, 1962

R. Peers, *Adult Education*, 1966

○1974年論文の引用文献

1972年論文で使用した文献資料を除いて引用文献をあげる。

第1次資料

- *Sheffield and Rotherham Independent*, 19 Jan. 1875, and 1 May 1877 (Sheffield Public Library)
- *Report of a Conference in Oxford on the Extension of University Teaching*, 1887 (Bodleian Library)
- *An Address delivered by Professor James Stuart, M.P., at the Inaugural Meeting of the First Blackpool Summer Assembly of the National Home Reading Union*, 1889 (British Library)
- Knight, Prof., *The University Extension Lecture Scheme in Scotland, being an Address delivered to the University Extension Society at Perth*, 1889. (St. Andrews University Library).
- *Oxford University Extension Gazette*, Five Vols. 1890-1895(Bodleian Library).
- *University Extension Journal*, Five Vols., 1890-1895(St. Andrews University Library)
- 'University Extension in England', [by G.F. Browne)] *Quarterly Review*, CLXXII (1891)(British Library)
- James, G.F., comp., *The Proceedings of the First Annual Meeting of the National Conference on University Extension in Philadelphia*, 1892. (Congress Library)

- ・ *Aspects of Modern Study Being University Extension Addresses*, 1894. (東京図書館印 明治 28 年 10 月 2 日購求印).
- ・ *W.E.A. Education Year Book*, 1918. (東京帝國大學附属図書館印、大正 8 年 12 月 21 日印).
- ・ University of Leicester, Department of Adult Education, *Annual Report, 1970-71*. (University of Leicester)

第 2 次論文

- ・ Harrison, J.F.C., *Learning and Living*, 1963.
- ・ Styler, W.E., ed., *Adult Education in East Yorkshire, 1875-1960*, 1965. (著者提供)

1) 国内図書館からの文献資料の蒐集

国内の図書館から文献資料を蒐集することは修士時代に行っていたが、引き続き国立国会図書館からは明治時代に購求したり、外国から寄贈されたと思われる第 1 次文献や第 2 次文献を 1 年間ぐらい蒐集した。これで技術教育、女性高等教育運動、大学拡張などの分野の文献が入手できた。大学拡張に関しては、1974 年論文の H.マカン (1890) や *Aspects of Modern Study* (1894) がここではそれに該当する。マカンの小冊子は、大学拡張講座に国庫助成金を求める意見書である。その次の *Aspects of Modern Study* は、ロンドン大学拡張協会が毎年開く受講生大会での講演録 (1886-1894) を集めたものであった。 *Aspects of Modern Study* は後者はイギリスで引用されたのを見たことがない貴重な文献資料である。東大図書館では *W.E.A. Education Year Book of 1918* を引用したが、それ以外にもイギリス大学改革史上で貴重な 1852 年の王立調査委員会報告書も十分に活用させてもらった⁽³⁵⁾。この報告書を精読して、近代の大学拡張が大学改革の文脈で理解することが必要であると解った。

2) 大英図書館からの文献資料の蒐集

修士時代には、スチュアート関係の講演録や著作を大英図書館から蒐集していたが、その後は大学拡張運動の基本図書を集めることと、主なエクステンションист (Extensionists、大学拡張運動家) の著作を蒐集した。1972 年論文の第 2 次資料 A であげている大学拡張の著作は、当時の拡張運動を全国的に広げていくための手引書であり啓蒙書である。R.G. モールトン、R.D. ロバーツ、W.H. ドレイパーはケンブリッジ、H.J. マッキンダーと M.E. サドラーの共著はオックスフォードの立場で書かれている。これらの基本図書はどうしても読んでおかねばならぬ同時代のテキストであった。大英図書館の蔵書で人名から著作を調べていくと、一人の著者でも膨大な文献リストになるので、その中から求める文献をピックアップするのも容易ではなかった。大英図書館への文献複写の依頼は個人で行ない、奨学金で支払った。大学院では、大学教授になるものは家を作ってはならない、研究条件のいい大学から声がかかっても動けなくなる、という戒めを受けていたし、長男であるので郷里の実家も継がないといけなかったので、個人の資金を使って蒐集した。

3) スチュアートの伝記に基づいての資料探索

近代大学拡張運動は、ケンブリッジ大学のジェイムズ・スチュアートが 1867—71 年にかけて女性教師や労働者の教育で巡回講座を行ったことで始まり、1871 年にケンブリッジ大学に公開講座を行う企画を提案、1873 年から 75 年にかけて実験を実施し、75 年に大学の正規の事業になっ

た。また同年、スチュアートはケンブリッジの初代工学部の教授 (1875-1890) になった。私の研究では、大学拡張理念の形成を問題にしていたのでスチュアートに関する資料はどんなものでも集めたかった。

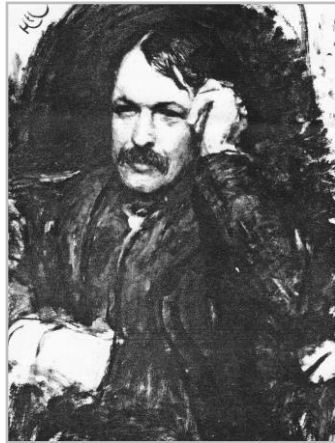


写真 4 James Stuart (1881)

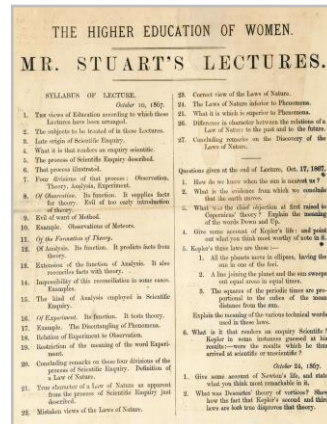


写真 5 Mr Stuart's Lectures, 1867.

当時はまだ彼についての印刷された単独論文はなかった⁽³⁶⁾ し、『英国人名事典』(D.N.B.)でも取りあげられていなかった。スチュアートが大学史や社会運動で見過ごされてきたことを問題にしたのは、次のふたつの論文が貢献した。すなわち、*International Biography of Adult Education* (1985) でウェルチさんが 'James Stuart' を執筆したことと、R. メイソンが、ケンブリッジの精神を持って社会改革や新しい学問に貢献した大学関係者を 16 人ほど取りあげた中にスチュアートも入っていたことから、より広く人々の関心を集めるようになった⁽³⁷⁾。

このような状況であったため、私は、スチュアートの自伝を徹底して読み、彼が卒業し関係した大学、大学拡張や社会運動で講演をした町や、下院議員の選挙で立候補したロンドンの選挙区 (Hackney, Shoredich, Sunderland) 会社経営をしたノリッジなどの町の公共図書館に問い合わせをして、資料を掘り起こすことを行った。その中のひとつが、*Engineering at Cambridge University 1783-1965* を著された T.J.N. ヒルケン先生宛への問い合わせであった。問い合わせの内容は同書で引用されている 1875 年の教授推薦文書と大学拡張運動の関係資料についてであった。工学部からの返事では、ヒルケン先生は 2 年前に病没され、資料は火災かなにかで紛失、大学拡張のことは分からないと伝えてきた⁽³⁸⁾。手紙による意思疎通がうまくいかなかったこの経験は、海外での資料蒐集でよい心得となった。ケンブリッジから資料を得られないとなると、研究そのものが成立しなくなるので慎重に対応しなければならなかったものと思われる。しかし、ケンブリッジ以外の所はすべて順調に意思疎通がいき、重要な第 1 次資料や未公開の成人教育史に関する学位 (修士、博士) 論文、新聞記事綴、地方都市の大学拡張団体の年報などを入手することができた。*Sheffield and Rotherham Independent* の新聞記事も年月日を指定してコピーを得たものである。特

に意図的に集めたのは、大学拡張に関する未公開の博士論文であった。イギリスにおける成人教育史研究での博士論文の基準を知りたかったのである。ここには、当時集めた未公開の博士論文をあげておく。

John Griffin, A Study of the Development of Adult Education in Scotland, Ph.D. dissertation, University of St. Andrews University, 1953.

The Critical Analysis of the Origin and Development of the Oxford and Cambridge University Extension Movement between 1873 and 1902, with Special Reference to the West Riding of Yorkshire, University of Leeds, A thesis submitted for the degree of Ph.D. by N.A. Jepson, B.A., May 1955.

Michael Hyle Jessup, A Historical Analysis of the Development of Selected Areas of University Extension Programs in the United States, 1900-1963, as Related in Professional Literature, Ed. D. dissertation, George Washington University, 1967.

3) ロンドン大学とオックスフォード大学の所蔵資料

ロンドン地区の大学拡張は、ロンドン大学教育拡張協会（ロンドン協会と略す）によって 1876 年から 1901 年まで運営され、その後は新生ロンドン大学の拡張部がその役割を継承した。ロンドン協会はその最初からケンブリッジと連携して運営されていたので、スチュアートが評議会の委員長となって長期にわたり指導していた。そのためロンドン大学図書館には、当協会の発足のための趣意書、年報、報告書、機関誌、書簡等の提供をお願いした。その結果、1875—87 年までの第 1 次資料の複写を得ることができたが、それ以上の文書は所蔵してないとのことであった。1972 年論文で引用したロンドン大学設立に関する王立委員会の報告書は、この時に取り寄せたものと思われる。

オックスフォードのボドリアン図書館からは、19 世紀の大学改革、オックスフォード運動、地方試験、大学拡張、女性教育、労働者教育の印刷された文書を、研究の進展に応じて必要な時に、1987 年までかけて順次入手し、原資料に基づいていくつも論文を作ることができた。マンチェスター大学のアーカイブからは女性運動関係の原資料を得ることができた。同アーカイブから、女性教育、大学拡張、労働者教育等での学位論文（修士論文や博士論文）をいくつか提供していた中に、ルモワースの修士論文があった。

Sheila C. Lemoine. The North of England Council for Promoting the Higher Education of Women, 1867 to 1875/76 University of Manchester, M.Ed. thesis, September 1968

この論文は、A4 で本文 411 頁、それに資料が 120 頁ぐらい付いていた。ルモワースは、女性高等教育振興北部イングランド協議会の教育運動を、近代的な講座の成立という観点から論じ、ある意味、大学拡張起源の歴史研究の成果として修士論文に仕上げていた。当時、読了して驚いたことを幾つか書いておく。

- ・ 基本資料は、同協議会の年報、メモランダム、その他の文書、ケンブリッジの大学拡張文書、スチュアート文書、当時の雑誌に掲載された論文、伝記等であること。

- ・ 実態を明らかにし、歴史上のデータを自分の研究目的に合わせて作図・作表し、それに基づいて解釈していること。
- ・ 当時行われた講座や試験の内容については、著者が現役のケンブリッジの試験委員 3 人に見てもらい、レベルを判定していること。
- ・ 法律文書ではなく、人物の考えたこと、書いたこと、行ったことを中心に記述していること。
- ・ 引用のノート（注）には、指導教授以外の人から得たヒントや意見などが参考になったときには、その人物の名前と日時が記載してあること。

ルモワヌの修士論文は、私と同じような問題関心で講座の成立を問題としており、私の修士論文でいうと、400 字詰原稿用紙 244 頁の内の 36 頁（第 1 章第 4 節、第 5 節、第 2 章第 1 節）の内容に相当するところである。私が判断したところでは、私の修士論文は、イギリスでは学部の課題レポートのようなレベルであって、研究にはあたらない、それに引きかえルモワヌの修士論文は、日本でなら最も優れた博士論文として認められるだろうと思った。日本での社会教育の多くの論文は、政府の政策と法令を基軸にすえて書かれ、役所や団体の名前は出てくるが人物は出てこないし、教育の内容も取りあげられない。これに対してイギリスの成人教育の論文は、政策や法令は出てこないで、誰が作ったのか、どのような人が指導したか、教育内容はどのようにして選択され、受講した人々の人間形成に講座がどのように与ったかが論文のテーマであり主要な部分を占めるということを知った。ウェルチさんは、ヒントをもらった人の名前を書くのはエチケットですと言われたが、著者の知的権利がどこにあるかを科学的・客観的にするために書かれるのだと思った。わが国の大学では知的財産をいうが、このような教育は文系の大学院生に指導されておらず、先に書いたものが勝ちという風潮があり、不快な思いをすることがあった。これをこの世の「虚仮」というのであろう。当時は、拡張講座で取りあげられるテーマや内容は、教養と学力の不足のため後日の研究課題として後回しにした。たとえば当時の大学拡張講座の人気講座は「経済学」と「英文学」であったかと思うが、これらの講座を論じるには相当な知識を要することなので、この時期には運営組織を問題とした。

4) 大学拡張を担当する構外教育部への資料調査

組織的に行った資料調査では、1971 年、助手の期間にイギリスの全大学に対して構外教育の実態調査をしたことも、私にとっては大事なことであった。私自身はヒストリアンではなく、わが国に大学拡張や高等成人教育を実現したいと思う実践志向が強かったので、全英にある各大学の構外教育部（Department of Extra-Mural Studies）の部長宛に、年報、カリキュラム、運営等の報告書等の資料の提供をお願いする書簡を出した。それにはもうひとつ、それぞれの大学に大学拡張関連の歴史文書にどのような資料があるかも尋ねた。これに対し、それぞれの大学から構外教育部の過去の年報、報告書、大学史など多くの資料が送られてきた。それらの文書を丁寧に読んで、解らないことを質問するという交信が続いた。この調査の結果は、「イギリスの大学における構外教育の実態」(I) と (II) (1978-79 年) という論文にまとめられた⁽³⁹⁾。ここで得た文献資料では、1974 年論文に載せたレスター大学成人教育学部の年報や、W.E. スタイラー教授からいただいた *Adult Education in East Yorkshire, 1875-1960* がこれに該当する。

同論文には、送られてきた資料を読んで、よく解らないことはそれぞれ質問して回答をいた

だき、論文にもそうした回答の一部を載せた。たとえば、大学の拡張講座での講師任用の基準とか産学連携の協定書内容などはどの著作にも書いてないので、直接聞いてみるほかなかったのである。その他にも構外教育部の部長（成人教育学の教授）や職員の方と親しくなり、19世紀の市民大学に根を持つ大学は、当時の議事録（MSS）や規約なども探して提供していただいた。30歳にも満たない助手が、まだイギリスでもほとんど研究対象となっていないジェイムズ・スチュアート、大学拡張や構外教育の複雑な構造を取りあげ、あれこれ質問してくるのに、丁寧に回答を寄せて下さるのを見て、つくづくイギリス人の学問に対する態度は公平公正であると学ばせていた。日本ではこの論文は引用されることもなく、社会教育関係者も無関心・無反応であった。イギリスの大学にはお礼に論文を送付したところ、ノッティンガム大学のマイケル・スティーブンス教授が手書きで次のような返書を下さった。この手紙の中で教授は、大学拡張を complex field と表現されているが、ネイティブにとってもその複雑な構造はわかりにくいのである。短いので載せておく。

2nd October '78



写真6 Letter of Professor M. Stephens

Dear Professor Kagawa

My thanks for the offprints of your article on British Extra-mural Studies.

My Congratulations on finding your writing around a complex field.

I hope we may get see the article in English ?

As you will see I have been at Nottingham since 1974 when Professor Wiltshire retired.

All good wishes,

Yours sincerely,

(signed) Michael Stephens

(3) ウェルチ博士の知遇を得る

大学拡張史を研究するとき、大学拡張城の本丸はケンブリッジ大学、大学拡張による労働者教育の本丸はオックスフォード大学であると思っていた。ヒルケン先生への問い合わせで、こんな質問をしてきて、といわんばかりのやりとりがあったので、熟慮を重ねてケンブリッジにもアプローチをすることにした。ケンブリッジへのアプローチは構外教育部調査の一環で、スチュアート文書があるかどうかを聞いた。この質問紙を受けた構外教育部長アンドルー氏から1971年12月8日付けの書簡が届いた。その書簡は、構外教育部の歴史を簡単に説明し、同封してある年報を読むように書いてあった。私がお尋ねしたいのは、スチュアートについてであると問い返したところ、それならばエドウィン・ウェルチ博士が適任だろうから紹介するという返事をもたらした。ウェルチ博士はその時は勤務先をケンブリッジ大学からオタワ大学の図書館学専攻に職場を変えていた。

ウェルチさんからの最初の書簡は、1972年4月21日付けで届いた。アンドルー部長から紹

介されたということで、私が所長に質問したことについて簡潔な答えがあった。たとえばケンブリッジ大学で設けられている Syndicate という委員会はどういう位置づけの委員会か、スチュアートハウスとは何かという質問に回答があり、その後に、大学拡張の運営などに興味があるのなら、数ヶ月間留学することを勧めると書いてあった。これに対して自己紹介をし、私の関心がスチュアート研究にあることを伝え、文献資料などの準備状況を知らせたところ話が変わり、ウェルチさんからの 7 月 25 日の書簡では、来年には『ケンブリッジ大学拡張百年史』(Peripatetic University) が刊行される、そのグラ刷りが近く来るからあなたに送る、スチュアートやロバーツの講演録などのコピーも送ると書いてあった。また、ウェルチさん大学拡張史研究でひとつのピークになっていたのも、大学拡張運動や女性高等教育運動などで論文を作る人たちが、論文の下読みや意見を求める連絡がよく入っていた。そのようなひとつにペンシルヴァニア大学のラーマ D. ポープの書いた博士論文もあった。

Rahma D. Pope, The North of England Council for Promoting the Higher Education of Women, 1867-1875/ 76, Ph.D. dissertation, University of Pennsylvania, 1972.

この論文も用事が済んだ後に送ってくれた。ウェルチさんは、私という研究同人を得たことをとても喜んでくれた。お互いに研究資料を交換したり、研究論文の作成で意見を述べ合い、最初から晩年まで、大学拡張の父と称されるジェイムズ・スチュアートの伝記を共著することで「研究を知らせ合う絆」があった。年齢的には宮坂さんとほぼ同じぐらいの年であった。

5. 宮坂先生との研究上の交遊

(1) 日本社会教育学会での出会い

私の日本社会教育学会のデビューについては、宮坂さんが2つの記事を書かれている。ひとつは、1969年10月7日の第16回の日本社会教育学会研究大会(於金沢大学)で、「英国における大学拡張運動の展開——J・スチュアートの生涯と業績をめぐって」という題で発表した時のことを、次のように書いておられる。

香川さんとは長いつきあいである。初めて会ったのは、日本社会教育学会の研究大会で、筆者はお茶の水女子大学の専任講師か助教授、香川さんはまだ大学院に籍があったのではない。大会で英国成人教育史に関する香川さんの研究発表を聴き、この新人研究者の研究姿勢に賛意と敬意を抱き、その旨の発言をおこなったことから、その後の長い交遊が始まった。

香川さんの研究姿勢というのは、史料をとことん蒐集して、それらを精密に分析して慎重に史実を確定しようとする態度である。ひとくちに言えば「実証主義」ということになる。そんなことは、歴史研究で当然に要求されるもので、研究方法論論議以前のレベルだと言われても仕方がない。しかし、当時の社会教育史研究、とくに西洋成人教育史研究の実態では、原史料の探索を断念して二次史料でもの言うような水準だったのである。そういう状況のもとでの香川さんの登場は、実に目ざましく、ブリリアントであった。⁽⁴⁰⁾

この記事で、宮坂さんがお茶の水女子大学の助教授、私が大学院生（博士2年）であったかということから、金沢大学での発表のことを言われているのがわかる。私はどこに宮坂さんがおられたのか、ましてやこのような感想を持たれていたなどということも2008年までまったく知らなかった。金沢大学での発表は『日本社会教育学会紀要』.6(1971年)に「十九世紀の英国における大学改革と大学拡張(1)」として掲載された。この論文のもとになった口頭発表の評価は宮坂さんがいわれるほど高くはなく、学会では佐々木正治氏に論文を書くようにという依頼をしたのだが、デンマークに留学される直前で多忙で、彼に代わって私が埋め合わせで書くことになったのである。その論文を見ると、論文を作るために使用した主要文献はスチュアートの自伝と、ヒルケン著のケンブリッジ大学工学史であって、原資料を使って書かれていない。

宮坂さんの面識を得たのは、2年後の第18回の山形大学での学会であった。学会発表の前日、同じ宿に泊まり、偶然お風呂でお会いした。先生は、手に包帯を巻いて湯に浸かっておられたので、それはどうされたのですか、というのが最初の会話であった。そのうち、話がほぐれてきて、お互いに名前を名乗ったところ、私はあなたの発表の司会をする宮坂です、明日の発表「19世紀英国大学拡張組織の研究」を聞くのが楽しみです、と言われたのを覚えている。2人の付き合いは、初めから裸の付き合いであった。

山形大学で開かれた学会で司会をされた宮坂さんの感想は、次のように書かれている。

ところが、筆者にはできかねた、原資料を駆使してイギリス成人教育史を書く若手研究者が、学会にあらわれたのである。そのころ、まだ20歳代終わりか、せいぜい30歳代初めだった香川正弘氏の登場である。たしか学会の研究集会での発表を聴いたのが初対面だったと思うが、衝撃的なデビューであり、筆者は当然讃辞を呈したと思う。その後彼との文通が始まり、彼の論文を読むようになって、日本における英国成人教育史研究は、ひとつの大きなエポックを迎えたのではないかという感を抱いた。香川氏は、日本にいながらでも、英国から資料をとりよせることは可能だということを実証して、筆者の怠慢を自覚させた。筆者も彼にならって資料蒐集の努力を始めたのであるが、その能力と執念において彼にはまったく及ばず、ただ脱帽するのみであった。⁽⁴¹⁾

この記事は2002年の宮坂さんの論文に書かれており、「その後彼との文通が始まり」と書いてあることと、年齢が20歳代の終わり、また原資料を駆使してということからして、山形大学での私の学会発表後の感想を述べられているのがわかる。この時、私の発表の司会をされた宮坂さんは東京大学の助教授で39歳、私は広島大学の助手で28歳であった。山形学会での私の研究発表が「衝撃的なデビュー」であったと書かれているのを読んだときは、そうだったのかと驚いた。発表後に話したことは、「先生は午後はどうされますか」と聞くと、「散髪にいきます」と言われ、「私は奥入瀬に観光に行きます」といったことも覚えている。学会に来て、空いた時間に散髪に行かれるというのは私には考えられなかったので、よく憶えているのである。その後、「文通が始まり」と書いてあるが、先生は日本の社会教育史の研究者であると思っていたので、その後もあまり研究上の接点はなかった。広大の助手職は機会を院生に平等に与えるとの方針で一年間務めて終わりとなったので、資料集めによく上京した。東大の教育学部の図書室の雑誌書架

には、英米・欧州の教育学系の論文がきちんと整備されていたので、イギリスの教育学系の雑誌から必要な論文を集めるためによく利用した。W.E.A.の機関誌 *The Highway and 'Students' Bulletin* ”や *Bulletin of the World Association for Adult Education*, o.s. と n.s.もこの時、コレクトさせてもらった。まだビジネスホテルなどのない時代であったから、友人や知人の家に居候していた。そうした折に、先生の研究室もお訪ねしたこともあった。6月だったか、秩父の札所巡りをしたとき、その帰途に池袋から電話をしたら、すぐに来いとのことで世田谷の家にお邪魔して、仏教談議をした覚えがある。そのうち夏の上京の時には一週間ぐらい居候させてもらったりすることになり、また翌年には、世田谷に何日間も泊めてもらったり、夏には角間新田の旧宅に泊めてもらい、諏訪大社から霧ヶ峰まで観光案内までしてもらったりした。また、私が上京するとご自分の大学院ゼミの授業を私の講義で代行させることも何回かさせられた。居候的分際であるから、それぐらいのリクエストは当然なことである。

私たちが話したり文通したりした内容には、研究上のことに加え、年頃のことであるから、お見合いのこと、就職戦線のこと、人間関係なども話をしたが、いつのまにか、人の人事などはいわない、人の善し悪しをいわない、相手の役に立つ研究情報は伝える、といった決まりができて、その通りに進んだ。研究については、私はすでに固有の研究対象と研究方法をもっており、その裏付けとして相当な資料を蓄えて自立している一研究者として対応してくださった。また、宮坂さんは、若い私が道を誤らないようにと常に気を遣っておられたようで、私の研究を誉めて有頂天にするようなことは一切いわれなかった。人の悪口や批判などが無い会話を積んでいくと、高談転清という感じをよく持ったもので、先生も手紙のやりとりの中で、時々、私たちの交わりが「清い」ということを書かれていたことがあった。余談であるが、あるとき、クラウザーの『産業革命期の科学者たち』（鎮目恭夫訳）という本を読んでいたとき、18世紀のグラスゴーにあったオイスター・クラブを描いた次のような文章に出くわした。

ジョン・プレーフェアは、スミスとブラックとハットンがオイスター・クラブというのをつくって、毎週そこでくつろいだことを書いている。「彼らの周りには、まもなく、これらの有名な人物の打ちとけた会話を評価するすべを知る人々の一団が形成された。これらの三人はいずれも偉大な才能と、大きな視野と、広い情報を持ち学者たちがときおり見せびらかす必要があると思っているような威厳や格式ばった態度など少しもみせなかった。三人はみな気軽に打ちとけ、相手に話しかけたり相手の話に耳をかたむけたりするにいつでもやぶさかでなく、彼らの友情の誠実さにはごくささいなねたみがかげをさしたことさえ一度もなかった。友好な交りに益するあらゆるものがこれ以上完全にそろっていて、それに反するあらゆるものがこれ以上完全に除かれている例を他に見つけることは困難だろう。会話はつねに自由討論であり、しばしば科学のことが話題になったが、教師的な態度や論争はけっしてみられなかった。……」⁽⁴²⁾

ここに登場する大学教授は、経済学者のアダム・スミス（1723－1790）物理学者のジョセフ・ブラック（1728－1799）、地質学者のジェームズ・ハットン（1726－1797）である。宮坂さん・ウェルチさん・私との交遊を、彼らの交わりを比べてみるのも不遜なことかもしれないが、聴衆がいないこととか、レベルと役者が違うことはあるにしても、3人の鼎談とよく似た話があ

るものだ、と思ったものである。

宮坂さんと一緒に『生涯学習の創造』(1994年)を編集したことがある。その前書きは香川が、後書きは宮坂さんが書いた。「あとがき」には次のようなことが書いてあった。これは宮坂さんが私との交遊23年目の総括である。

われわれはともに社会教育学者として発足した。英国成人教育史の研究への関心を共通にしていたので、学統・年齢・気質の差を超えて親しくなった。われわれの学問分野では、出身大学・所属大学・イデオロギーなどのちがいにとづく学閥・学派の対立が生じやすく、そういう環境の中での筆者と香川氏の友情は、珍重されるべきものと思っている。

われわれは私利私欲の一致で仲良くしようとしたのではなく、研究上の誠実という点で相互に尊敬しあえたから、時には争いながらもこんにちまで交友をつづけたのであろう。

(43)

(2) イギリス成人教育史研究をめぐる 論争

こうして、私は1971—72年に、宮坂広作さんとエドウィン・ウェルチさんという2人の学友を得た。私自身の研究については、自分の所属する大学院でも、学会でもほとんど語ることはなく、自分で考え自分で決めたことを行っていくだけだった。同時代史の文献を読んでは、年表や図表を何度も作ること、抜き書きをすること、そして海外と資料を集めることで頻繁に交信することに明け暮れていた。海外との交信録はA4背幅5センチのファイルが9巻、背幅3センチのファイル4巻が今も残っている。

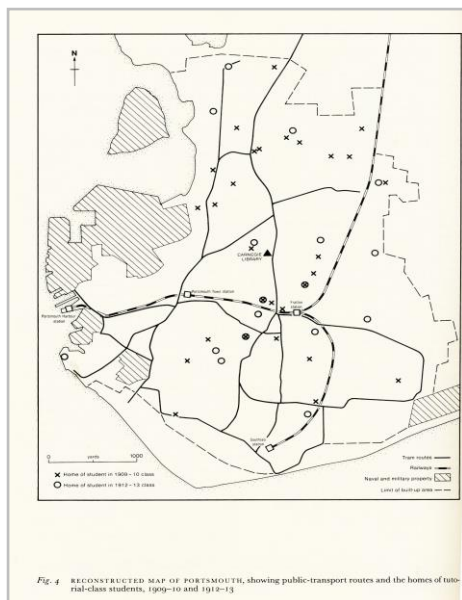


写真7 ポーツマスでのチュートリアル・クラス
受講生の住所地図、1909年度と1912年度

大学拡張史の研究ですぐに親しくなったのは、冒頭で紹介したオタワ大学にいたエドウィン・ウェルチ博士であった。ウェルチさんは、教会史が専門で、仕事はアーカイヴィストであり、時に大学の公開講座の講師も務めた経歴を持っておられた。知り合ったのは1972年のことで、Peripatetic University の最終校正が済み、索引づくりのチェックをしておられるときであった。

ウェルチさんは実証主義の人で、イエローナイフに訪ねたときだったか、今はこれを調べているといってチュートリアル・クラスの出席者名簿に記載されている住所に地図上でマチ針を刺しておられ、これでどれくらいの距離から受講生が集まったかがわかる、という説明を聞いたことがあった。

その時に話しておられた1909年度及び1912年度のポーツマスでのチュートリアル・クラス受講生の住まいと公共の輸送機関とを示した復元図は、後に *Records of University Adult Education*,

compiled by Edwin Welch という著書に掲載された⁽⁴⁴⁾。

この時のテュートリアル・クラスの授業名と詳しい記録は次に載っている⁽⁴⁵⁾。ちなみに詳しい記録とは、地元とケンブリッジ大学とのクラス開設交渉の記録、シラバスの構成、受講生名簿、クラス運営経費に支出状況、講座についてのチューターの詳細なレポートで構成されている。1886年から1939年までにポーツマスの町で開かれたケンブリッジの拡張講座のひとつひとつにこうした記録が残されているのであるから驚くべき記録魔である。同書の序文にウェルチさんは、日本にある佐賀大学の香川さんから研究資料のコレクションから情報を提供してもらったと書いてあるが、それはポーツマスで開かれた講座に漏れがないか、私のもつ資料で点検をして欲しいという依頼があったことに対する謝辞であった。もう忘れてしまったが、抜けていた講座をいくつか指摘したので、感謝されたのだと思う。

MICHELMAS TERM 1909. 1909-10 Economics, by W.T. Layton

Cambridge tutorial class, first year. Twenty-four weekly lectures. Saturday, evening 9 October and on unknown date in winter.

MICHELMAS TERM 1912. 1912-13 Political Science, by C.K. Webster

Cambridge tutorial class, fourth year. Twenty-four weekly classes. Friday, starting 25 October and 17 January.

また、論文に関係なく、大学拡張のいろんなデータを資料化してはよく送ってくださった。ウェルチさんの資料の集め方は、手紙を活用された。必要な資料は図書館の参考係やアーカイブへの手紙でほとんど入手されていた。私たちは一緒に『ジェイムズ・スチュアート伝』を作るのが夢で、長い時間をかけて資料をお互いに集めた。ウェルチさんは、スチュアートの生まれた町や子孫の方を訪ね、その時の様子を手紙で報告したり、スチュアート家一族の系図も送ってこられた。ウェルチさんの資料集めの方法や資料を読んで考えるプロセスについては、私も同じことをしていたので、研究の話で齟齬が生じたことはなかった。集めた資料では、ケンブリッジの原資料を項のレベルまで割って活用できるようにしているので、私の方が多くの有用な資料をもっていたように思う。

他方、宮坂さんとの研究の話は、最初はウェルチさんのようにはいかなかった。先に引用した「あとがき」に、「時には争いながらも」と書いてあるのがそれである。最初の頃に何が話の中心になったのかよく覚えていないが、過去に私が書いたイギリスの大学拡張の論文などは議論の対象になったことと、イギリスに行かずに日本にいて、どうして原資料をたやすく集められるのかが気になって仕方がないようであった。宮坂さんは「生涯学習の遺産発掘」の論文の中で、「東大図書館の蔵書にも、ろくなものがなかった。戦前の日本で、英国やその他の国の労働者教育史にふれた本やパンフレットはいくつかでていたのであるが、それらの記述のもとになっている英書は、なかなか入手できなかった」⁽⁴⁶⁾と述べておられる。それはさておき、山形大学でお会いしてから2年して講談社から梅根悟監修の『社会教育史 I』（1974年）が出版された。宮坂さんはこの本の刊行を鶴首して読まれた。その結果、次のような感想を書き残している。

同書のイギリス編を大いに期待して読んだのだが、その結果は「落胆というより呆れ果てた、労働者教育協会の叙述のために使用されている文献は、平田隆男『大学と労働者教育』、M.T. Hodgen の *Workers' Education in England and The United States*、それに中村賢二郎『世界労働運動史』(上)であって、「いかに通史的記述であろうと、れは無知と言わんよりは無恥である」と。⁽⁴⁷⁾

これほどの酷評はわが国でも珍しいだろう。その翌年の1975年には、日本社会教育学会(会場校は京都大学)が「社会教育史研究の方法——イギリス成人教育史をめぐる」というシンポジウムを組んだ。これは講談社の『社会教育史』にイギリス関係で論文を書いた、真野典雄、奥田泰弘、それに私の3人を登場させて、それぞれのイギリス成人教育史研究の方法論を発表させる試みであった。研究方法を人前で話す気にはならなかったが、自分の経験を整理して、発生史研究の重要性、社会教育認識の抽出法、資料批判の必要性等を論じ、社会教育における歴史研究の目的は、個別な学習運動からそれぞれの社会教育の認識を抽出することであると主張した。このシンポジウムの発表内容は、学会紀要のNo. 12に掲載された⁽⁴⁸⁾。この時の発表後、宮坂さんに発表はどうでしたかね、と聞くと、赤子の手をひねるような発表だった、という感想を漏らされた。

1971-74年の間における私たちの研究上の議論は、歴史研究の方法論に関してであった。宮坂さんのイギリス成人教育史への関心はすでにわかっていたが、研究対象が明確でないので一般論で議論をすることが多かった。香川さんはなぜそんなに資料を集めるのか、スチュアートが誰と食事をしたかなどわかったからといって、それがどういう意味があるのか、と盛んに挑発された。これは、19世紀の大学拡張の起源など研究して、いったいわが国の現在の課題にどういう意味があるのかなど、当時の歴史嫌いや哲学嫌いが言う批判的言辞を集めてきて、先生も愚問だと知りながら、私に問い質しておられるのであった。こういう質問については、大学院の博士課程の時代から責められることが多かったので、私なりの回答は用意されていた。私からは、ふたつ質問をしたことを覚えている。ひとつは、先生はなぜあれこれ今日的な問題に評論を書かれるのですか、そんなことは研究者のすることではないのではないですか。もうひとつは自分ではヒストリアンと思っておられるようですが、歴史的研究者というように思えますが、どうですか、と言ったことがあった。前者のことについては、子どもの成長とともに教育問題を論じているのだ、といわれ、後者については、では私はなんですか、と聞き直られ、歴史研究と歴史的研究とは違います、と応えたものである。お互いにもっとひどいこともいったと思うが、これが私たちの論争のピークであった。このようなことは1975年のシンポジウムの発表をもって終わって、二度と議論になることはなかった。

(3) 宮坂先生、在外研究に向けての準備

宮坂さんは、東大の教授になられた年(49歳)に在学研究でイギリスへ行かれることが決まった。その時のことを次のように回想されている。

英国での在外研究は、長いあいだの夢であった。

そもそもイギリスの成人教育(adult education)の歴史に関心を持ったことが契機にな

って、社会教育の大学院に進んだのである。学生時代から三〇年間にわたって憧憬しつつけながら、これまでついぞ渡英する機会が与えられなかった。いや、幾度かチャンスがあったものの、そのたびごとに公私の支障に妨げられて、夢はなかなか実現しなかったのである。五〇歳を目前にした「最後のチャンス」が実現して、ついにイギリス行きが決まったとき、大いに欣喜雀躍した……。⁽⁴⁹⁾

こんなに渡英を願望されているなら、研究でも精神的にも準備をなさらないわけがない。その情報源はたぶん私であったと思う。私の方は、宮坂さんにイギリス成人教育に関する論文が皆無であるから、成人教育史研究の何処に関心があるのか解らなかったので、貢献のしようがない状態であった。1977年に私の勤めていた佐賀大学に「社会教育方法論」の集中講義で来ていただいたことがあった。この時、宮坂さんは、私の研究室や家にあるイギリス関係の資料を見ることができた。1977-79年には、「生涯教育体制下における高等成人教育教育の理論的・実証的研究」という課題で文部省科学研究費を取られたので、それに私も参加させてもらい、ご一緒に研究したことがあった。この科研費で、宮坂先生は、イギリス成人教育関係の単行本やパンフレットをかなり購入することができた。宮坂さんから私に対して資料提供を求められたので覚えているのは、私が A. マンスブリッジの W.E.A. (Workers' Educational Association) 設立提案となった3論文を訳して大学の紀要に発表したところ、その原文を求められたことがあったぐらいであった⁽⁵⁰⁾。イギリスの大学構外教育部の調査をしたのがきっかけで、イギリスの成人教育学の教授たちからいろんなリクエストが私の所に来るようになった。W.E.A.を日本で組織したいので協力して欲しい、市民教育について知らせて欲しい、世界規模の歴史学会で University Extension を提起するので日本の学会からも推薦をして欲しいとかというのもきた。これらのリクエストは、私の手に余ることであるので、宮坂さんにその都度相談した。宮坂さんの回答は次の通り。日本の労働者教育協会は政党色が強いので彼らが求めているのとは合わない、市民教育では明正選挙など恥ずかしくて言えない、社会教育学会は大学拡張に特別に関心があるわけではない、ということでそれぞれ断ることになった。もっと大事なことは、私とウェルチさんとの間の交信で宮坂さんの関心のありそうなことは、その情報を共有してもらっていたことと、私がイギリス研究で継続的にしていた資料蒐集の状況を報告していたことであった。この2つが、宮坂さんには最も関心のあることだと思ったからである。他方、ウェルチさんとは、研究の関心が大学拡張運動とスチュアート研究で一致していたので、「研究をしらせあうという絆」は強いものがあった。私の研究資料でウェルチさんに特に有用であったのは、私が英米豪の大学拡張雑誌を集め、それに掲載している記事を全部カタログ化していたので、1890年からならば、どこの町で誰が何をしたかというようなレベルの情報を引き出せるようになっていたことであった。このことは、宮坂さんが近代日本社会教育史ゼミで雑誌を読んではカードにしていた、と書いてあるのと同じ作業を大学拡張雑誌でしていたということで、何千という講座やクラスを実態で知っているということは、大学拡張の研究や実践では必要な知識であると確信したものである。

ウェルチさんは、1977年に、*Guildhall Studies in London History* に 'The London Society for the Extension of University Teaching, 1875-1902' という論文を発表された。ロンドン協会は、ケンブリッジ大学拡張と連携して発達したので、ケンブリッジの拡張を知っていれば、手を付けたい

研究テーマである。同論文の冒頭に、この論文を作るために、ロンドン大学図書館、同大学公開教育部のスタッフ、ケンブリッジ大学のアーカイブにも協力してもらって 1875-1902 の期間の年報、議事録、講座リストなどを探したが、摩訶不思議なことに何もなく空っぽであることがわかった。納得するために考えられた理由が、たぶん、第2次大戦での空襲で焼失したのではないか⁽⁵¹⁾と推測されるという結論を出したようであった。そういう話が私にも伝えられたので、ロンドン協会の運営に関する原資料のうち、年報は 1877-85 年まで、また評議員会の議事録と年報は 1880-87 年まで、それに試験結果の報告書、規則集、講演録、寄付者リストなどを私は持っている、1888-1901 年は持っていない、この期間の年報や講座一覧は *University Extension Journal* という雑誌に掲載されている、日本の国立国会図書館にはロンドン協会が毎年開いた受講生大会での講演録を集めた *Aspect of Modern Studies* も所蔵されている、と報告したところ、すぐに送れということになった。もちろん、本文に日本の佐賀大学の香川正弘氏から大変親切にも提供していただいたと特筆大書きされていたが、どうして原資料がロンドン大学図書館から紛失したのか、私にも不可解なことであった。資料で私が持っていて相手方が持っていないということも時々あって驚かされることもあった。ウェルチさんにスチュアート夫人の書かれた論文が雑誌にあったというとびっくりしておられたし、アバディーン大学の図書館にスチュアートがそちらで講演したときの講演録は持っているのを除いて資料を探しているという、私たちの大学の図書館にはあなたの持っている講演録がない、なぜお持ちですか、といっずいぶん驚かれたこともあった。また、地方都市の図書館から大学拡張の新聞切り抜き帳 (newspaper cuttings) を提供してもらうと、お返しに目録を作って送るといった自発的サービスをするから感謝もされた。ウェルチさんとの交信は、宮坂さんにもよく報告していたので、資料に対するイギリス人の歴史研究者の研究態度や、ライブラリアンの対応は日本に居ながらにしてよく熟知されていたと思う。

6. 大学拡張運動の組織的な資料蒐集

私は大学拡張のコレクションを作るために、1977 年頃から本丸であるケンブリッジとオックスフォードのアーカイブから原資料を得ることに務めた。以下、1976—78 年の間にケンブリッジ大学図書館アーカイブ、ボドリアン図書館、労働組合、1984—85 年にボドリアン図書館アーカイブと東京大学総合図書館から大学拡張とそれに関連する資料や論文を大量に集めた。

(1) ケンブリッジ大学図書館アーカイブ

ケンブリッジの大学拡張文献サーヴェイは、最初に工学部に接触して失敗したのが薬になって実力がつくまで接触を避けるようにした。今まで自分で集めてきたものを読み活用できるように整理し加工するのに必要な時間が 3 年ぐらひは必要であった。この間、ウェルチさんとの研究情報の交換を頻繁に行い、たぶん 1975 年頃に、彼が作った *Archives of the Board of Extra-Mural Studies* (1970) を提供してもらった。これはアーカイヴィストが持つタイプ印刷された手引書で、資料がどこに分類保管されているかを記録してあるものである。内容は 54 に区分され、特定文書、議事録、書簡集、講座書類、シラバス、会計・出納簿、年報、カレンダー、講座リスト、試験、修了証、チュートリアル・クラス報告書、地方センター関係、講師連盟、機関誌、W.E.A., 諸外国、雑誌というようなくりで整理されていた。ひとつの独立した区分

にあがっている特定文書だけを拾うと、Stuart Papers, Colman Papers, Moulton Papers, Cranage Papers, Hickson Papers, Matthew's Papers 等があった。それぞれの区分の下にまた項の区分がある。たとえば、スチュアート文書の場合、書簡、新聞切り抜き、印刷された文書、個人の記録、というように区分されていた。

これらの文書を手に入れることについては、責任者の H.E. ピークさん (Keeper of the Archives) と E.S. リーダム＝グリーン博士 (Assistant to the Keeper) が対応してくれた。どちらも歴史学を修めた専門家であり、リーダム＝グリーン博士は、後にケンブリッジ大学史を出版される人だった⁽⁵²⁾ ので、かなり高度な質問にまで対応してもらった。この BEMS 資料を私が得るにあたって、先方が出した条件は、私たちは資料をマイクロフィルムで提供する、その場合、1 セットはあなた、ついでにもう 1 セットはケンブリッジに保管できるように、あなたの費用で作らせてもらいたい、という条件がついた。喜んでその条件で了承したものである。最初にピークさんに発注したのは、セント・アンドルーズ大学から取り寄せた *University Extension Journal*, five vols のうち、欠頁部分を提供してもらうことだった。当時は複写機がないのでカミソリで必要な頁を切り取ったりする輩もいたから、それを埋め合わせることから始まった。どの資料を提供してもらうかという交渉が 1979 年までかかり、茶箱 2 つぐらいになるほどのマイクロフィルムが届くことになった。茶箱を使うのは、フィルムにカビがわくの避けるためであった。これらの資料は、ほとんど第 1 次資料で、議事録や書簡、原稿の校正などに手稿 (MSS) が多く含まれていた。

(2) オックスフォード大学ボドリアン図書館

同じ頃、オックスフォードのボドリアン図書館からも大学改革と大学開放に関する資料を継続して入手していた。ボドリアン図書館の書誌目録に基づいて文献複写を依頼するのであるが、院生時代に依頼したのは大学拡張提案が中心であったのに対し、1877 年頃の依頼はオックスフォード運動関係資料、大学宗教審査法廃止法、大学開放、労働者教育が中心になった。イギリスで大学拡張が問題になったのは、1834 年に出了れた大学に非国教徒の入学を認める法案 (A Bill to remove certain Disabilities which prevent some classes of His Majesty's subjects from resorting to the Universities of England, and proceeding to Degrees therein, 21 April 1834.) であった。大学に非国教徒を入れないという方針は、1603 年の宗教審査、そして 1672 年の宗教審査法によって決められていたが、これを撤廃する動きが 1834 年の法案になり、最終的には 1871 年の同法廃止法 (A Bill to alter the Law respecting Religious Test in the Universities of Oxford, Cambridge, and Durham, and in the Halls and Colleges of those Universities. [34 vict.] 1871) が通って大論争は終結した。この 1871 年の大学宗教審査法廃止法案、すなわち大学開放法案が議会を通ると、すぐにスチュアートは大学拡張提案を大学に出して、現代の大学拡張が動き始めることになる。大学教育を国民のものにするという観点から、その次の課題は労働者教育ということになり、そういった資料を中心に集めたのがこの時期であった。特にチュートリアル・クラス関係は集中して集めることができた。研究上必要だという理由を付けて大学の根幹にかかわる稀少な文献資料のリクエストをするので、General Secretary とか Superintendent of Photographic Service といった高い地位の人が私に対応してくれた。それくらい資料を提供していいかどうかの微妙な問題を含んでいたリクエストであったからである。

資料の蒐集は、研究の段階に応じて必要になるものが違うので、集中して集める時期が何度かあった。1977—78年に提供してもらった文献資料は博士論文を作るのに十分であったが、その次に1984—85年にかけてまた大量に資料の提供をお願いした。この時は、オックスフォードが大学拡張を始めて百年ということで、ウェルチさんがケンブリッジで行った文書整理と同じことを同大学図書館のアーカイブで着手し始めた時だった。アーカイブには、ケンブリッジで大学拡張資料を提供してもらったことを伝え、ぜひオックスフォードの大学拡張委員会の議事録等のコピーが欲しいと頼み込んだ。この件の担当は、アシスタント・アーカイヴィストのR. ヴァイセさんであった。押し問答の末に、1985年1月18日付けで、University Extension Delegacy 1877-1897 という鉛筆書きの手引書を送っていただいた。こちらは、Archive deposited by Oxford University Department for External Studies, これを略してDESで書架番号が振られていた。内容は、ケンブリッジのBEMS資料と同じようなものであるが、19世紀関係の大学拡張資料、20世紀の第1四半期の時期のMSS文書、及びMichael Sadler's Adult Education Documentsなどもこの時期に入手することができた。

後のことだが、宮坂さんの『英国成人教育史の研究 II』には、次のようなことが書かれている。

イギリス大学拡張史研究として高い評価が与えられているのは、Jepson, N.A., The Beginning of English University Adult Education - Policy and Problems. Michael Joseph, 1973である。日本でこれと同じテーマに取り組んだのが香川正弘で、彼が広島大学に「英国に於ける大学拡張の初期形態」と題する修士論文を提出したのは1968年である。その時点でもジェプソンの著書が刊行されていたら、香川はどうしただろうか。ジェプソンの著書の存在を知ってのうえで同じテーマの博士論文を書くためには、少なくとも資料面で彼を上まわって蒐集することが前提になる。香川はそれに挑戦し、ケンブリッジ大学のarchivistだったウェルチらの助けを得て、膨大な原資料の入手に成功した。彼が不屈の執念によって辛苦の末それを達成したことは、当時イギリス成人教育史研究の同行者だった筆者の熟知するところであるが、後年筆者がある資料を入手すべくイギリスの某大学のアーカイヴィストに会いに行ったところ、「Mr. Kagawa から膨大な資料のコピーを強請され、ほんとうならそんなことはできないのだが、彼の熱意に負けてひどいhard workをしてしまった。君が求めているのはその時と同じ資料だから Mr. Kagawa にそうしてもらうようにしてほしい」という対応を受けた。⁽⁵³⁾

宮坂さんのこの文章には、ジェプソンの博士論文があっても、香川は同じテーマの博士論文で挑戦したか、と書いてあるが、問題なく挑戦したというのが解答である。ジェプソンの大学拡張の捉え方は成人教育運動からであるのに対し、私は大学教育改革からであったので、彼の研究成果が私の競っていた起源論への回答にはならなかったからである。大学拡張は、いろんな事情で大学にくることのできない人たちに大学教育を提供することである。この議論の発生が、イングランドの大学に特有な排他性、とりわけ大学宗教審査にあることはあきらかであり、それを問題にしない起源論は受け入れられなかったのである。もうひとつ、ここに書かれている「イギリスの某大学の

アーカイビスト」とは何処の誰のことか、と長い間、考え込んだものである。内容からすると、宮坂さんがノッティンガム大学の図書館で経験されたこととは思われないし、さりとてケンブリッジのアーカイヴィストが不平を言うわけでもないはずだと思えこんだのである。今回、宮坂さんの年譜を見ていると、1987年7月13-15日、オックスフォードで開かれた比較成人教育会議に出席されたというのを知って、それならわかる、アーカイブを訪ねられた時に対応したアーカイヴィストが答えたのがここに述べてあるのだと理解した。「ほんとうはそんなことはできないのだが」というくだりは、後述する「Albert Mansbridge と初期 W.E.A. (その2)」に書かれているテュートリアル・クラス合同委員会の議事録までコピーして送ってしまったということに違いないと思った。若気の至りで、職務権限を越えるようなことをさせてしまったことには私にも自省の念があり、いずれはこれらの貴重な原資料は、オックスフォードかケンブリッジのアーカイブにお返ししなくてはならぬと思っている。オックスフォードの大学拡張については、DES 資料だけでは解明が難しく、ボドリアン図書館での印刷された第1次資料と合わせて見る必要がある。以上、1977年という年は、宮坂さんにとっては在外研究が2-3年後に迫っているときであったから、私のケンブリッジとオックスフォードからの資料蒐集と交渉を注意して見ておられたのである。

(3) 労働組合から労働者教育史資料の購求

第1次資料の蒐集を組織的行った中に、自伝と労働者教育の蒐集があった。歴史研究では原資料が必要であるが、原資料は1-2枚の紙切れだったり、小冊子のメモランダムとか企画書だったりして、それだけを持っていても、その文書がどのような意味を持つのかは、よほど事情に精通していないと何も解らないものである。研究者はそうした文書を扱うので、著者や関係者が解っていると、その文書がどのような文脈で書かれたものであるかを確認するために、自伝を読むことになる。当時は現在のようにアマゾンがあるわけでもないから、ロンドンの古書店2軒と仲良くなって資料蒐集に協力してもらった。一軒はアンドリュー・ジョーンズという伝記専門の古書店で、有名無名の人物の伝記などの私家版まで入手できた。もう一軒は社会科学を扱う古書店でハマスミスであり、古書やパンフレットの現物を集めてもらった。たとえば、このような連絡があった。原文を書いておく。

One item on your wants list — (4) Ellis, A Secret History of the N.C.L.C., 1937 was suppressed after legal proceedings but we know a scholar who has a copy of this rare pamphlet & we could supply this for £7.50. (A letter of Ronald Gray, 5th April 1979).

このような単品でも労働組合や労働者教育のパンフレットを集めては連絡をしてきてくれた。次の事例は、イギリスの共産党が演劇運動を行っていたときのガリ版刷りの機関誌で、タッチの差でオランダ人よりも先に入手することができた。後に事情を知ってその人には私からコピーを送付した。

W.T.M. Bulletin, No.5 (September—October, 1933), mimeographed copies, [Theoretical and organisational journey of the Workers Theatre Movement - British section of the International Union of Revolutionary Theatres]

今、当時の書類を見ていると、1980年1月29日には1792ポンドとか1100ポンドとかという恐ろしい金額が並んでいて、道楽とはいえよく買ったものだと思う。私はその店の上得意客なので、ある時ハーマスミスに、19世紀から20世紀前半の労働者教育に関するパンフレット現物が欲しいというリクエストを出した。同店はいろんな組合に問い合わせ、ある労働組合が資料を適切な値で処分していいといっているが、どうするか、といい、'Adult Education Collection'という題目のもとにパンフレットのリストをつけて購入の有無を問うて来た。リストは部分的なものであったが、全体として信用できるものである。1978年12月12日に商談をまとめてくれた労苦に報いるため、言い値、すなわち314.05ポンド(為替1ポンド390.80円)で購入した。

段ボール2個ぐらいに入った現物を受け取ったのは1979年1月頃で、すぐに検分して見たところ、貴重なパンフレット、議事録、報告書が詰まっていた。この時に取得したパンフレット類は、退職してから書架番号を付けて私のコレクションに加えた。その文献リストは『UEJジャーナル』第9号に掲載されている⁽⁵⁴⁾。それらはすべて現物で有り、そのほとんどは第1次資料である。労働者教育関係では、このほかにもオックスフォードやケンブリッジから得た複写資料や単行本などが別にある。

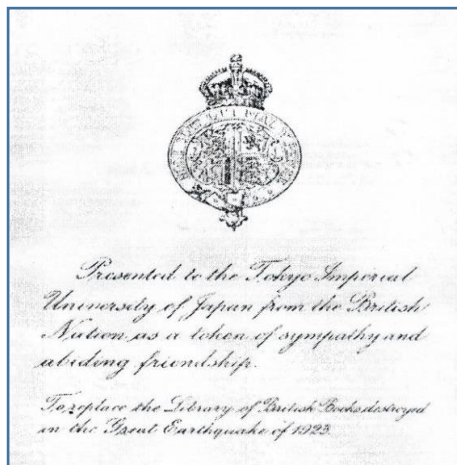
(4) 東京の大学図書館での雑誌論文探索

1977-79年頃は、学位論文を書き始める直前であったので、最終的に文献資料を集中して集めたが、国内では、東京大学総合図書館、一橋大学図書館、上智大学神学部図書室、それに松山大学の藤井泰教授の研究室にあるイギリス関係の蔵書、それに広島大学教育学科西洋教育史研究室、社会科教育法の研究室、英文科の図書室など学内広くお世話になった。

一橋大学の図書館では、全国社会科学振興協会が発行した紀要 *Transactions of the National Association for the Promotion of Social Science* 1867-84 を閲覧しに日参した。この団体は、社会を改良しようとするリベラルな団体や個人が結集した協会で、多くのヴィクトリア朝の社会改革の原案は、ここで提起され実践に移された⁽⁵⁵⁾。大学拡張もそうである。ちなみにスチュアートの大学拡張構想は、1871年10月にリーズで開かれたこの教会の大会で「高等教育での大学の活動について」と題して発表された⁽⁵⁶⁾。スチュアートが大学拡張の構想をこの協会で行ったということに関連して、もうひとつスチュアートの相談相手になってもらった団体がある。それはケンブリッジ大学のエリートが集まった秘密組織「司徒会」(The Cambridge Apostles)であった。この会の会員(司徒)に選ばれたスチュアートは、会員たちの協力を得て拡張運動を推進した⁽⁵⁷⁾のであるが、このことはまったく知られていない。また話を雑誌に戻して言及しておきたいことでは、上智大学の神学部図書室にある *The Dublin Review* を閲覧したことがある。この雑誌は1836年創刊で、カトリックの立場から社会問題を論じていて、オックスブリッジの教育や、科学、女性、労働者等について広く意見を社会に発表している。

東京大学の図書館は国立大学の共用施設ということから、夏休暇のうちほぼ一ヶ月間を使って地下一階の雑誌書架で、19世紀のイギリスの雑誌を閲覧した。私が創刊号から19世紀の末ぐらいまでを丁寧に見たのは次の雑誌であった。以下、雑誌名(思想的立場、刊行年)という

順で書いておく。*The Edinburgh Review* (Tory, 1802—); *Quarterly Review* (Whig, 1809—); *Fraser's Magazine* (Tory, 1830-82); *Macmillan's Magazine* (Liberal, 1859—1907); *The Contemporary Review* (Liberal, 1866—); *Nineteenth Century* (Metaphysical Society, 1877—); *National Review* (Conservative, 1883—)。これらの雑誌は、創刊号から全部新品同様な状態で揃っていて実に壮観であった。必要な論文のタイトルを書き取っていく作業を地下の蒸し暑い中ですので、一日いるとぐったりすることになる。雑誌は八折半で印刷され製本されているので、ペーパーナイフで切らないと読めないのが多くあった。19 世紀の中葉から後半にかけてはパンフレットと雑誌での意見発表の時代であった。だから、グラッドストーン首相を始め、大学教授や社会運動家などは、自分の思想にあった雑誌で意見発表をした。その意味でこれらの雑誌は第一級資料として扱える。どうして東大の総合図書館に、イギリスの著名な雑誌の創刊号から揃っているのかという疑問は、製本された雑誌の表紙の裏に貼ってあった次の文章を読んでよくわかった。それは書票の形で短い文章が貼ってあったので、原文どおり載せておく。



Presented to the Tokyo Imperial University
of Japan from the British Nation as a token of
sympathy and abiding friendship.

To replace the Library of British Book designed
in the Great Earthquake of 1923.

写真 8 東京帝國大學図書館にイギリスから
寄贈された雑誌に貼られていた票

これは *Nineteenth Century*, LX-52 (June 1881) の 表紙の裏に貼り付けてあったもので、そのほかにも寄贈した図書館名、例えば *Atheaum Library Liverpool* などのゴム印が押されている雑誌も多数あった。たぶん、施設やその町にある雑誌を点検し、日本の学問のために 1 セットずつ寄贈してもらったのだと思った。書き留めた論文名で急いで読まなければならないと思ったものは、風呂敷に包んで法学部の地下でコピーをするという重労働もあった。不急の論文は大学図書館経由で複写を依頼した。ここにあげた雑誌以外にも当時の多くの雑誌から、大学宗教審査、大学拡張、女性教育、技術教育などの分野の論文や記事を見付けることができた。

1972—79 年、特に 1976—79 年にかけての大学拡張資料の資料の蒐集は知恵を傾けて行ったが、今から考えると、いくら研究のためとはいえ、度が過ぎていたかも知れない。このような資料蒐集活動のうち、宮坂さんには、ケンブリッジ、オックスフォード、ハマスミスの場合にはよく報告したので、在外研究が回ってきたらこの要領で資料を蒐集する構想が立てられたと

思う。東京大学の雑誌のことは、宮坂さんの所属しておられる大学のことであり、加藤克子さんも知っておられたのだから言うに及ばずである。ウェルチさんにも進捗状況は連絡していたが、1878－79年の頃は、オックスフォード大学拡張の開始期をめぐって、*Studies in Adult Education* 誌上で、スチュアート・マリOTTと大論争を繰り広げていた頃である。これは、マリOTTが、ウェルチさんの論文 'Oxford and University Extension'には解釈の間違いと指摘しことから出た論争であった⁽⁵⁸⁾。ウェルチさんはその論文の草稿を事前に私も下見をしてたいして問題はないと思っていたので、こんなに大きな論争になるとは思わなかった。ウェルチさんはこれに忙殺されていたので、ハーマスミスや19世紀の雑誌論文の話題などは連絡することが少なかった。

宮坂さんは、このような論争も見て、成人教育史の歴史研究について深く考えられたと思われる。在外研究から帰国されてからの論文に、生涯教育を専攻する若い人々を意識して、成人教育史の歴史研究について書かれることが多くなった。

- ・そもそも他国の成人教育史を真に理解しようとすれば、その国の歴史・経済・文化について深い理解を要するのは当然である。(1992年)⁽⁵⁹⁾
- ・日本における外国成人教育史研究の現水準からすれば、歴史の細部にわたる事実認識もおろそかにできず、また同時に理論的認識の深化のためにインテンシブな努力をしなければならぬ。(1983年)⁽⁶⁰⁾
- ・イギリス成人教育史研究に限定していえば、むしろ原史料を徹底的に探求し、自分の眼で史料を読み解くような実証的態度こそが要請されるべきなのである。(1992年)⁽⁶¹⁾
- ・「研究者」は、単に「事実」を提示するだけの「研究」について、「理論」は正確な事実にもとづいて構成されなければならないから、なによりもまず実態や事実を把握することが大切だと自己弁護し、手つづきの厳密さに自足し、それがアカデミズムだと自称する。ところが、問題意識がシャープでないので、長い時間と労力をかけて発見した事実にはほとんど何の意味もなく、そこから何の理論も創出しえない。事実を探し求めることに終わる「精密な」調査を、事務員的正确さで遂行するだけである。

鋭い問題意識は、意味のある研究をうみだすための必須の条件であるが、問題意識だけで論文は書けない。丹念なデータ蒐集の努力やデータを解読する論理的思考の能力を欠いては、論文にならない。また、論文としてのごく基礎的な要件、ルールも必要である。⁽⁶²⁾

補遺 大学等図書館アーカイブでの資料点検

私の最後の大がかりな文献サーヴェイは、1989年8－9月に渡英し、大学やカレッジのアーカイブを訪ねて資料の点検をしたときであった。ケンブリッジ大学拡張はBEMS資料に頼りすぎていたので、オックスフォードと同じように大学のアーカイブから大学改革と大学拡張に関する印刷された第1次資料を集中的に集めるようにした。*Cambridge University Reporter* (No.1, 1869－No. 390, 1881)を閲覧したのもこの時である。この大学公報を読むことで、ケンブリッジの学内状況を時系列で押さえることができ、スチュアートの投稿した記事や人事記録を発見することができた。ケンブリッジ大学ではあと2カ所、オックスフォード大学でも2カ所、ロンドンでも3カ所のアーカイブを訪ねて主に資料と照合する作業をした。この時の旅行では、ロンドン労働者カレッジの地下にあるMuniment Roomでは100年前の手紙の山から関連した資

料を探したりもした。最後に大英図書館の MSS Room ではグラッドストーン文書を閲覧して、1850 年代の大学改革に関する文書を 31 通発見した。スチュアートはグラッドストーンの娘婿になると言われた人であるので、スチュアートのことで手紙はないかと思い探索した。MSS Room での席を確保するために、朝は午前 7 時に大英図書館の門扉の前に並び、夕方までいるということは何日もした。やっと 1 通のスチュアート関係の電信文を見つけたが、筆写したノートを書いて処分したので、わからなくなったので何も言えない。1990 年には、マンチェスター大学ジョン・レイランド図書館と頻繁に連絡があり、オーウェンズ・カレッジの資料を提供してもらった。このカレッジは、近代市民大学のモデルになったカレッジである。19 世紀の大学拡張資料の発掘はこれがたぶん最後になった。

大学拡張のコレクションでは、アメリカの大学拡張の資料がある。私の学部、大学院の学生に林裕子さんという学生がいて、修士論文は「大学拡張運動のアメリカ化に関する研究」(1996 年) という題目で書いた。アメリカ留学もし、かつ渡米してひろく貴重な資料を集めて優れた論文を書いたが、民間会社に就職した。2010 年頃、林さんから、修士論文作成で集めた資料を恵投されたので、私の大学拡張コレクションに林さんの資料も加えさせてもらった。

7. 宮坂先生のイギリス労働者教育史研究

(1) ノッティンガム大学のクラス授業に参加

宮坂さんのイギリス成人教育史研究は、在外研究でノッティンガム大学に行かれたことで本格的に始まった。先生は、「学生時代から 30 年間にわたって憧憬しつづけていた夢がやっとかなかった」⁽⁶³⁾ と書いておられるほど喜ばれ、長年抱いておられたイギリス研究に専心することができるようになった。研究の場としてノッティンガム大学を選ばれた理由は、宮原教授が、1963 年に文部省在外研究員として約半年間ノッティンガム大学に在籍されていたことにあったと思われる。この時に宮原教授が見聞したり考えたりしたことが、「大学と市民——イギリスの成人教育」(『朝日ジャーナル』1962 年 12 月 16 日) に生き生きと書き残されている⁽⁶⁴⁾。その小論を読めば、宮坂さんが、躊躇なくノッティンガム大学を在学研究の場として選ばれたことが理解でできるというものである。

ノッティンガム大学での宮坂さんの研究活動は、ふたつに分かれる。宮坂さんの身分はリサーチ・フェローであった。この身分は、大学施設を使って自由に研究することができることを意味しているが、ここでは特別に大学院での授業に参加されたことと、残りの時間はイギリス労働者教育の資料を蒐集しては読み、すなわち研究し、また新たに蒐集されるということを繰り返された。前者の授業への参加については、折角の機会なので自ら願い出てディプロマ・コースの授業に出席された。この授業参加については、「生涯学習の遺産」に感想が書かれている。

ノッティンガム大学では、Stephens 教授や Wiltshire 教授のゼミに出席していた。つまり、英国における成人教育史研究のオーソドックスな学風に接したわけである。ひとくちに実

証主義といわれるようなものであり、筆者がかねてから親近し、自分もやってきたような方法である。あまりにも新鮮味がないように感じて、Department of Adult Education (大学成人教育部) で市民や労働者に歴史を講じている、若手の歴史学者に接近し、教えを乞うた。⁽⁶⁵⁾

憧れのイギリスに留学して、宮坂さんが自らのライフワークと定めていたイギリス成人教育史の講義に出てみると、自分が日本で親しんでいるのと同じことを講義されるので、特に得ることもなかったといわれている。宮坂さんが私のことで、「イギリスへ行かなくて原資料を得て」「イギリス研究で博士論文をつくった」人といわれているのが聞こえてきたことが何度かあったが、同じように宮坂さんは「イギリスの大学へ留学しなくて、イギリス人と同じ歴史研究法を会得されていた」と言えそうである。

このゼミクラスの最後の頃に、宮坂先生はスティーブンス教授に、自分がこれまで研究してきたことの要点を発表させていただきたいと申し出られて、「当日筆者はイギリス成人教育史研究の方法論について述べ、併せてイギリス成人教育の発展段階について表式化したものを提示した」⁽⁶⁶⁾と書かれている。

まずい英語を恥じつつ、成人教育史研究方法論について報告し、伝統的実証主義と構造(シエーマ) 論的歴史観の双方を総合——残念ながら実際には折衷にすぎなかったが——する方法を提起した。これは Stephens 教授から誉められ、のちに教授はそのときの印象を彼の著作の中で書いている。たしか、日本の学者には創造性に欠け、輸入学問に終始している者がすくなくないと聞いていたが、必ずしもそうではないということをこのとき認識したという趣旨だったと覚えている。⁽⁶⁷⁾

この時の発表がどのような内容であったかわからないが、研究方法論であったのは確かである。この引用文の中には、「日本の学者には創造性に欠け、輸入学問に終始している者がすくなくないと聞いていた」と書いてあり、イギリス人は的確に日本人の学力を観察していると感心させられることであった。実際に、そういう日本の学者たちの間にいると、「輸入学問に終始している」という指摘はよくわかることである。英米ではやる生涯学習論があると、先を争って紹介し、盛りが終わると紹介もしばみ、次の新論を見ては誰かが取り上げて同じことを繰り返すという状態がみられる。日本人の成人教育研究者というのは、他の国で生まれた生涯学習の学説を追い求めるような大学教授たちだと、スティーブンス教授も内心思っておられたのであろう。そんなこともアプリアリに知っておられる宮坂さんは、賢明にもイギリスへ在外研究に行くまではイギリス研究の論文をほとんど書かれなかった。

宮坂さんの今回の発表は、日本的発想でのイギリス研究ではなく、イギリス人と同じ方法論をもって労働者教育史を分析した講義であったので、評価されたのだと思う。実際、この時のスティーブンス教授の評価は高くあり、「45 分いっぱい、彼はすばらしい学識と主題についての多くの新鮮な洞察を示した」⁽⁶⁸⁾とも書いておられる。後に宮坂さんがこの時ことで私に報告されたことに、日本人のイギリス成人教育史研究についても言わねばならなかったのが、香川さん

の研究を紹介させてもらった。すると、スティーブンス教授は学生たちに、極東に若い歴史研究者がいる、君等も歴史研究をしないといけない、といわれて面目を施すことができたと言われた。当時のノッティンガム大学成人教育学は社会学からのアプローチが人気であった時期だったので、教授は自分が言いたかったことを宮坂さんの発表に重ねて学生に説教されたのだろう。

(2) 労働者教育資料の蒐集

宮坂さんの在外研究の大きな研究活動は、自分の問題関心に合わせて資料にあたることと、これから社会教育学を研究する人たちが学位を取得できるほどの成人教育に関する基礎的な文献資料を蒐集することであった。後者の例は、空海や円仁の入唐の心意気に通じるところがあった。宮坂さんは、研究をパブリックに考えられる人で、イギリスの文化に関する文献資料がわが国に入ることは、それだけ日本の文化が豊かになる、と考えられて、イギリスでも限られた時間と資金の有効活用を常に考えられて集書にもあたられた。若いときから、宮坂さんのイギリス研究の最大のネックは、史料の入手が困難であるといわれていた⁽⁶⁹⁾が、それでもイギリスの図書館にチャレンジされていたことは、イギリスでの文献探索でも有用な経験となった。次の文章には、そのチャレンジがうまくいかなかった理由が書かれている。

日本から請求しても、紙が脆くなっていてコピーに耐えられないとか、既にその史料は香川氏に送ってあるので彼にみせてもらえとかいろいろな理由で拒否されていた⁽⁷⁰⁾

宮坂さんは渡英前に、私の集めたコレクションは大変貴重なので散逸しないようにして欲しいということと、在外研究では、香川さんの蔵書している資料は蒐集しないようにする、と伝えてこられた。イギリス成人教育が研究するための基本的な文献資料は、ベースになるノッティンガム大学の同僚や司書の協力を得て整え、その後は、「資料の蒐集のために、イギリスの各地——僻遠の地まで——を駆け回ったし、購入できない資料は借り出してコピーをした。」⁽⁷¹⁾と書かれている。

渡英されたときには、ヒストリアンとして、大学で史料を探すにはアーカイブに行くのが当然だと思っておられた⁽⁷²⁾から、宮坂さんはオックスフォードのモドリアン図書館のアーカイブを、労働者教育に関する委員会議事録等を読む目的で訪ねられた。その時に読まれたのは、リューリーハウスに所蔵されている大学テュートリアル合同委員会の議事録(1908年11月14日)であった。これは「どうしてもわが目で実見したいとかつて熱望」していたもので、「資料を、やっと目のあたりにすることができたのである。門外不出の資料をこうして読みえたときの感激は、20年経った今も忘れることができない。」⁽⁷³⁾と述べられている。

「オックスフォードのアーカイブスで、あいにくの冬季、火の気のない、埃っぽい部屋で筆写に明け暮れた日々のことを思い出す」⁽⁷⁴⁾という記述もあり、一心に鉛筆で筆写されている姿が目につく。アーカイブでは、ボールペンや万年筆を使うのは厳禁である。文書が改竄されたりする恐れがあるので必要事項は鉛筆で筆写することが決まりであるからだ。この時に筆写された議事録の要約は、「Albert Mansbridge と初期 W.E.A.の形成(その2)」の注(74)に載せられているのは委員会会合の議事録は、第1回委員会(1908

年11月14日)、第2回委員会(1909年1月30日)、第4回委員会(1909年3月6日)の記録であった。宮坂さんが寒い中、門外不出の原資料を感激しながら筆写された議事録がどのようなものであったか、第1回の議事録を写真版でお見せしたい⁽⁷⁵⁾。宮坂さんが感激して筆写されたのだから、本当にご苦労さんでした、といたい。

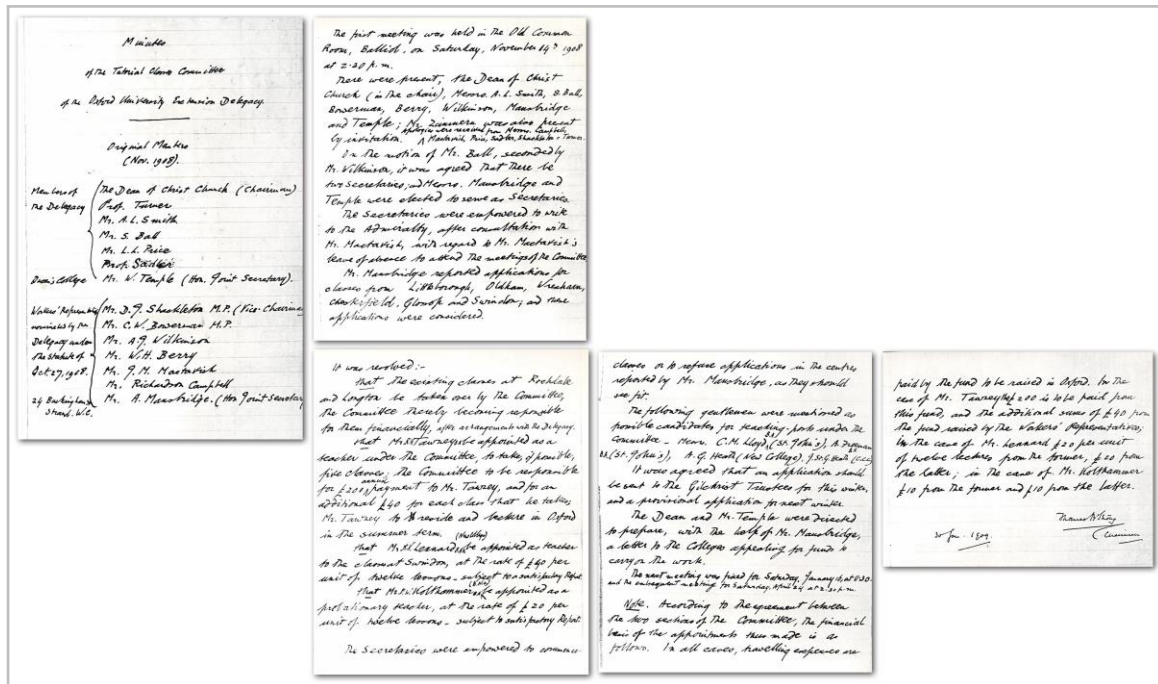


写真9 オックスフォード大学チュートリアル・クラス合同委員会第1回議事録

資料の蒐集では、広く成人教育史に関する専門的な文献や行政資料を集められた。特に歴史研究を行うための史資料を集中的に集められたのは、ロッチデール教育ギルド、W.E.A.、ラスキン・カレッジ、N.C.L.C.といった団体に関する史資料で、未公開の学位論文、単行本、論文、パンフレット、リーフレット、シラバス、新聞記事、報告書、企画書、ハンドブック等であった。労働者教育ではパンフレットが多く作られたが、現物で入手できるものは、古本屋や関係機関でも購入され、入手が難しいものはコピーを取られていた。コピーを取る場合も、事前に「まず斜め読みをして見当を付け、コピーを依頼した」⁽⁷⁶⁾と書いてあった。今回の「宮坂広作先生」学習会で書庫を見せてもらったところ、大量のコピーした書類があった。これを自分でコピーされたのなら重労働だったろうと思ったが、控えのノートを読んでいると、ライブラリアンや人をお願いしてコピーをしてもらうので、手許はいつも経済的には逼迫しているとメモ書きされていた。そうした資料蒐集で注目させられることが2件あった。

ひとつは、生活協同組合の資料の蒐集である。ロッチデールは消費者協同組合の発祥の地であり、組合員教育や市民教育で有名なロッチデール教育ギルドがあった。歴史的にも、大学拡張が始まるとき、スチュアートはロッチデールの労働者に講座を開いていたし、オックスフォードが大学拡張に本格的に乗り出すときも、サドラーは協同組合との連携をまず確保した。

W.E.A.の成人教育活動を有名にしたチュートリアル・クラスもロッチデールで最初に関講された。このようにイギリス成人教育を裏で支えた団体が協同組合であったので、その拠点に向かわれるのも正鵠を得ている。ここで調べられた資料は、「ロッチデール史料」という表題を付けてA3ファイルにひとまとめに綴じられている。その中に含まれている文書は次の通りである。

- Ruskin Hall Lectures. Six Public Lectures on Saturday, Feb. 7th, 1903.
The England of the our Grand Fathers: Its Political, Social, and Economic Features' by Mr. F. Bower Alcock, [syllabus]
- Oxford University Tutorial Class in Industrial History. 'Tutor's Report on first session's Work' by R.H. Tawney, April 25th, 1908. [with examiner's report]
- Rochdale Observer, April 18, 1908.
- Rochdale Education Guild, Treasure's Statement for Year ending March 31st, 1908.
- Newspaper Cuttings, Rochdale Observer, April 12, 1905 — April 30, 1910. fols. 98.

これらの史料を見ると、チュートリアル・クラスの最初の時期の実態を知ることに関心が集中していることがわかる。

もうひとつ、注目すべき資料蒐集は、労働者教育運動で、W.E.A.（労働者教育協会）と対をなす N.C.L.C.（独立労働者教育運動）を指導した総書記の J.P.M.ミラー氏（1893－1989）を訪ね、直接パンフレット資料を購入されたことである。わが国でも、W.E.A.のことは比較的知られているが、ラスキン・カレッジや N.C.L.C.といった労働者教育カレッジについてはほとんど知られていない。宮坂さんはピアーズの著書から独立労働者教育運動について学んでおられ、それがラスキン・カレッジの紛争から生まれた運動で、その中心地はスコットランドにあったことを知っておられた。成立期に関心のある宮坂さんは、この運動の最初の段階で活動したジョン・マクリーン（John Maclean）の史資料をエディンバラ国立図書館に詰めて調べられた。この時に見られた資料は、G.P.M. Millar Collection であった。N.C.L.C.の基本的な資料もここで入手され、未公開論文等でコピーできないものは筆写してあった。その次に、エディンバラ大学やマンチェスター大学で N.C.L.C.に関する修士論文も入手されている。

Ruth Frow, Independent Working-Class Education 1909-1930, M.A. thesis, University of Manchester, April 1966.

J.H. Roberts, The National Council of Labour College, M.Sc. dissertation, University of Edinburgh, 1970.

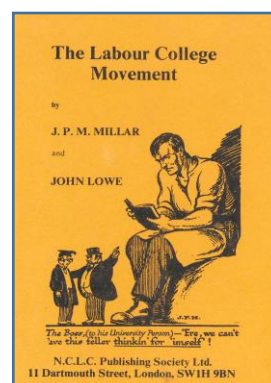
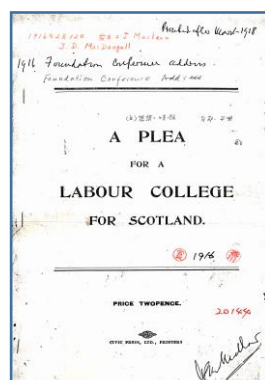


写真10 *A Plea for a Labour College
for Scotland, 1916.*

写真11 J.P.M. Millar and J. Lowe
The Labour College Movement

ミラーも日本では知られていないが、この人も左翼系労働者教育では重要なオーガナイザーであった。ミラーの行ったことは、1922年にレーバー・カレッジ群をまとめて全国労働カレッジ協議会に衣替えし、その設置目的を「労働者階級の観点から、カレッジ、学級・公開講座などの方法により、労働者の教育を行うこと」⁽⁷⁷⁾として、積極的に組織化を図ったことにあった。宮坂さんがミラー氏に会われたときのことは次のように書かれている。

入手した資料の中でやや貴重なものは、N.C.L.C. (National Council of Labour Colleges) 関係のものである。これは、W.E. A. (Workers' Educational Association) と対抗し、イギリス労働者教育運動の左翼的潮流だった組織であるが、その中心人物だった J.P.M. Millar から直接購入した。氏は、南英のリゾート地で年金生活を送っており、筆者が面会を求めると、氏の方から資料売却を申し出てきた。主要資料は、氏の郷里であり、運動の中心地でもあったスコットランドのエディンバラ図書館に寄贈したので、残っているのは大したものではないが、ということではあったものの、言い値の方はかなり高額であった。筆者は、運動を多年支え、今痴呆の妻を抱えて苦労しているこの先人に敬意を表するために、値引き交渉もほどほどにして買い取ることにした。これらの資料は、N.C.L.C.の刊行した書籍が主なもので、歴史研究の資料としては一級の価値はないものの、Millar 氏が最後まで手もとに留め、愛蔵したものという歴史博物館的な意味での貴重書である。⁽⁷⁸⁾

この話は宮坂さんらしく、先人を敬い、情のある対応であると思う。この時に買い取られたパンフレット類は、宮坂さんの蔵書の中からすぐに見つけることができた。N.C.L.C.のパンフレットには、労働者を中心において、資本家・大学教授・警察という3者がちょっかいを出すのを労働組合幹部が論ずというわかり易い挿絵が入っているからである。いずれにしても、イギリスの成人教育史を形成した一人の運動家に直接お会いになられたことは、在学研究の大きな収穫であったに違いない。持ち帰られた蔵書の中には、女性教育やケンブリッジの大学拡張の資料はほとんど発見されなかった。これは私が蔵書している文献資料は集めないという約束が生きていることを示している。

(3) 先生の蔵書形見分け

宮坂さんがイギリスで入手された文献資料は、まとまり次第段ボールに詰めて世田谷の自宅に発送された。

資料（コピーと書籍）がある程度溜まると、東京のわが家に発送した。わが家ではしだいにそれが堆積し、ついの一室を占拠してしまい、妻は資料の上に寝ざるををえないことになった。これは、妻にも資料にも申し訳ないことであったが、「兎小屋」にしか住めぬ貧

乏学者として、家族にも受苦してもらわねばならないことであった。⁽⁷²⁾

この文章の中に「妻は資料の上に寝ざるをえないことになった」という表現があるが、それは決して大げさな言い方ではない。私が若いときに宮坂さんの家に居候していたとき、先生の寝室は、真ん中に布団が敷いてあり、その周囲に 30-40 冊も本がうずたかく積もっていた。この表現からすると、積み上がった本の下にまず段ボールを置き、それでも収まらぬから、布団を剥ぐって空いたところにも段ボールを置き、その上に布団を敷いて奥さんは寝たということになるのかと想像された。宮坂さんは段ボールに番号を付け、在外研究のノートにそれを記載されていた。そのノートを見ると、30 冊ぐらいまで箱の数字があったような記憶がある。ノートはいずれ処分されるだろうと思って広島へ持ち帰ったはずなのに、いくら探しても出てこないのが正確にいうことができないのが残念である。

これらの文献資料を収めた段ボールは、諏訪の角間新田にある実家に移送された。宮坂さんの集めた文献資料を収納したプレハブは 3 棟あった。一棟は 2 階建てで、一階・二階ともに 18 畳、後の二棟のプレハブ書庫は母屋の前と後ろにあり、それぞれ 6 畳ぐらいの広さであった。窓の部分を除いて壁際に床から天井まで本が積み上げられており、分野ごとにまとめられて置いてあった。この仕事は長男の耕平君が 1-2 年の時間をかけて分類整理されたものであると聞いた。大変時間がかかった作業に違いない。イギリス関係の文献資料は、一階のプレハブ書庫と母屋の前のプレハブ書庫に集中していた。私が注意をして見たのは、一階のプレハブにあった A 3 に拡大されたコピー資料の綴りであった。ここには A 3 のファイルを収納する段ボール 5 箱分に相当する分量のコピーが箱から出して重ねて置いてあった。

また、この一階には成人教育施設や団体のパンフレットやプログラム等が詰まった棚があり、未開封に近い A 3 の段ボールがいくつも重ねてあった。これらのコピーの棚は丁寧にみて、第 1 回の訪問では、そのコピーの一部を車に積んで帰った。それでも一週間もたたないうちに、気になっていたコピーや文献パンフレットがあったので再度訪ねて、プレハブ一階と二階の棚にあるコピー書類を細かくみて、必要な資料を戴いて帰った。第 3 回目は第 2 回目の「宮坂広作」学習会が開かれたあと 1 週間後に、今度は母屋の前にある 6 畳のプレハブ書庫をもう少し丁寧に見たいと思って出掛けた。この 6 畳は、壁面にいっぱい洋書を中心にしてイギリス関係の本が詰まっており、中央のあいたところ (2 畳分) に埋高く 1 冊以上コピーした書類が積み上がっていた。

個々のコピー書類は、私が提供した資料のコピーや国内でのコピーが集積されていたようなので、上の 30 冊ばかりだけは見て、書き込みのある文書だけを採録した。30 冊より下は探索する気力が出なかった。宮坂さんも、自分で必要と思った書籍は、たとえ大学の図書館に入っても自費で購入されたりコピーをして保有するという習慣があった。この習慣は私にもあって、同じようなことをしておられると思ったものである。

宮坂さんの苦心して集められたイギリス成人教育史資料のうち、私が持ち帰った文献資料は、単行本が約 150 冊、パンフレットは 150 部、複写した文書 A3 ファイル 80 冊ぐらいであった。

これらの文献リストは別途に内訳を書いて公表するつもりであるが、それらは本当に氷山の一角であった。選書するときの基準では、私が労働組合から買い取ったり所蔵して文献資料は省くことにしたが、宮坂さんが書き込まれた文献資料は、私が所蔵していても持ち帰ることにした。広島へ持ち帰った文献資料は、「宮坂コレクション」として、棚番号をつけて私の大学拡張コレクションに加えさせてもらった。共通の棚の名称は Miya と付け、宮坂さんと私の印を押して、他の文献資料とは区別できるようにした。

例 1 Miya—1877 The Educational Department of the Rochdale Equitable Pioneers' Society Limited: Its Origin and Development. A Paper read by Mr. A. Greenwood before a Conference of Delegates published by the Central Co-operative Board (Manchester: Co-operative Printing Society Limited, 1877). Pp.16.. [複写].

例 2 Miya—1920 William Ferris Hay, Education and the Working Class ([Liverpool]: Liverpool and District Council for Independent Working-Class Education, 1920), Pp. 23. [現物]

持ち帰られた資料のうち、宮坂さんが自分で名前を付けられたファイルが数多くあったが、複写の山の雰囲気味わっていただきたく、その一部を下にあげておくことにする。

Nottingham Andragogy

Plebs Vol.II 1910—1911 A3 ファイル 空色

協同組合運動の一世紀 昭和 50 年 A3 ファイル 空色

John MacLean: A Fighter for Freedom, 1944, A3 ファイル 桃色

L.L.E. Stocktaking, B4 ファイル 空色

Education of Adults in G.B. by D. Legge B4 ファイル 空色

M. MacMillan, A4 ファイル 草色

Living Water, by Harold Begbie, [1918]? B4 ファイル 空色

海外成人教育資料 [1988-1990] A4 ファイル 空色

Death Education, by T.G. Oliver, Diploma, A4 ファイル 桃色

Plebs Vol. I A4 ファイル

Plebs Vol. II and Vol. III A4 ファイル

Radical Approaches, II A4 ファイル

Barnsley Area A4 ファイル

成人教育 緒論 ファイル

W.E.A.論集 ファイル

Tutorial Class ファイル

私関係では次のふたつが印象に残った。ひとつは書庫 2 階で本や資料集を見ていると、B5 のファイルに「寺社・詩歌 香川正弘氏蒐集」という題のついた冊子があった。そのファイルの表紙の裏には、私の退職時にホテル・ニューオータニで開かれたお別れ会で、壇上に家族がひな壇に並んでいる写真「香川氏家族（上智大学退職時）」がセロテープで貼り付けてあり、

私と生後一ヶ月の初孫、パートナー、娘2人、息子1人、娘の夫というように続柄が書いて貼ってあった。その後に、私か送った社寺巡りの記録や校歌の資料が丁寧にバイントされていた。また、その綴りの中程に、先生が私の退職時に餞として書いて下さった「茫たり交遊四十年」という記事の英文タイトルについて、意見を書かれているのが挟んであった。これを宮坂夫人に見せると、夫がこんなことをしていたことなど少しも知らなかったと驚いておられた。2009年4月16日付の先生からの手紙に校歌の問い合わせが書かれているから、5月ぐらいに作られたファイルではないかと思われる。折角なので形見にいただいて持って帰った。

もうひとつは、仏壇の近くに私が書いた「イギリスの大学拡張ジャーナリズムの研究」(『生涯学習・社会教育研究ジャーナル』4(2010年)、105-143頁)が置かれていたことである。仏壇のある部屋には先生の遺品や著作が集められていて、このような論文冊子があるべきところではないのであるが、2010年の論文の抜き刷りとなると、宮坂さんの最晩年にあたり、「丞相病篤かりき」の時期のことである。偶然のこととは思うが、ひょっとすると、病床で関心を持って読まれたのかもしれないと思った。そう思ったのは、宮坂さんが次の論文を書かれたことがあったからである。

宮坂広作「科学の創造・教授・普及の問題——大学拡張の原理に関する歴史的考察(1)」
『大学を中心とする社会教育社会教育組織化の研究』(文部省科研報告書1967年2月)
51-65頁。

この論文で、宮坂さんは「アカデミズムとジャーナリズム——学術の創造と普及」を論じられた。宮坂さんの論文名と私の研究とは名前が似ているが内容はまったく違う。宮坂さんが若いときに抱いていた夢を思い、研究生活を振り返らせる格好の読み物になったのではないかと考えた。

(4) 先生のイギリス成人教育史研究

このようにして集めた史資料をもとに、宮坂さんは1981年の帰国後から東京大学を定年で迎える1992年にかけてイギリス成人教育史研究の成果を次々と論文にして発表された。

「AlbertMansbridge と初期 W.E.A. (その1)」『社会教育学・図書館学研究』7(1983年)
「イギリスにおける婦人教育の新しい波」『社会教育学・図書館学研究』8、1984年3月
「英・米における＜自助＞・＜互助＞の学習運動」『東京大学教育学部紀要』26(1987年)
「英国における失業問題と教育的対応」『成人職業教育の再編に関する研究』(文部省科研費総合研究報告書1988年)
「社会教育における「労働と学習の結合」の問題」『東京大学教育学部紀要』27(1988年)
「英国における大学成人教育の革新」(宮坂広作『生涯学習の理論』明石書店(1990年6月))。
「成人教育における「学習の自由」の問題——ラスキン・カレッジにおける「学生叛乱」の教育的意義」『東京大学教育学部紀要』37、(1991年3月)
「AlbertMansbridge と初期 W.E.A. (その2)」『社会教育学・図書館学研究』16(1992年)
「19世紀における英国協同組合運動の教育活動」『協同組合原理の再検討』東京都生活協同組合連合会(1992年8月)

これに未発表の次の3つの書き下し論文を加えて『英国成人教育史の研究』IとIIに編集して1996年に上梓された。

「ワーキングメンズカレッジの成立と展開」

「19世紀におけるイギリスの成人教育」(大学院特殊講義草案)

「イギリスにおける労働者教育運動の二つの潮流—W.E.A.と独立労働者階級教育運動」

本書は、日本人によるイギリス成人教育史と題した本の最初のものであり、宮坂さんが教養学科の学生の時から抱いておられたイギリスの労働者教育史研究が、実地にゆかりの地を見られ、原資料等も一部見られていたので、他に見られぬ優れた研究論文となった。宮坂さんが『英国成人教育史の研究』のために書かれた論文12本のうち、私が評するのもおこがましいが、1991年と1992年に発表された3本の論文と、書き下しの「イギリスにおける労働者教育運動の二つの潮流—W.E.A.と独立労働者階級教育運動」の論文は、イギリス人の研究者のレベルを抜いている論文になっていると思った。ここには在学研究でノッティンガムに行かれた時の資料に加えて、1987年にオックスフォードを再訪や、1991—93年に上智大学の大学院や学部で非常勤講師を勤められたときに得られた原資料も活用された論文になっているからである。では宮坂さんのイギリス成人教育史研究論文の意味を考えてみたい。

最初に指摘したいことは、宮坂さんのイギリス研究への取り組みは、日本的な発想から脱却した研究になっていることである。日本の社会教育史研究の特徴は既に指摘しているので重ねていう気にならぬが、まず政府の方針、法令ありきで社会教育を見ていくことにある。社会教育では、法が適切に運用され行政指導がうまく機能するかどうかが問題として取りあげられる。これに対して、イギリスの成人教育は、官ではなく民間での学習運動として始まり、民衆が相互の向上をめざす団体(mutual improvement society)を作って行うという成人教育の歴史的経緯を尊重する。学習運動の発生は、特定の個人が社会的理想を追求することで発生し、学習運動の理念から参加者や受講生が自己変革や人間形成をしていく経過を問題にする。宮坂さんは、このようなイギリス的発想をよくご存じであった。日英の成人教育の違いと格差については何度も書かれているが、先生の研究視点は次によくあらわれている。

社会思想が、研究者の間だけでなく、労働者のあいだにも流布されていき、協同組合運動や労働運動の指導理論になったことと、その流布に大きく貢献した労働者教育に貢献した大学人がいたことを知って大きな感銘をおぼえたのである。

筆者の知る限り、日本ではそのようなことがなかった。社会思想であれ、哲学であれそれらはごく一部の専門家たちによって研究され、その内容を理解できたのは少数の知識人、学生だけであり、国民の大多数をしめている農民や労働者は、それらと無縁な生活を送っているようにみえる。

英国の社会事業施設であり、労働者教育機関でもあったトインビー・ホールを訪れ、そのことを日本に紹介した金井延(河合栄治郎の岳父)にしても、それをあらためて紹介した河合にしても、講談の学者に終始し、自らは勤労者啓発の実践にかかわったことは

ない。それに比べれば、英国の思想家・学者は、象牙の塔で紫煙をくゆらせていただけでなく、成人教育・労働者教育の実践に身を挺したのであった。⁽⁸⁰⁾

イギリスの成人教育の特色は、思想家や学者が学習運動を起こし、それに共鳴する大学人や知識人が運動に身を捧げていって、それぞれの専攻する学問を国民生活に活かそうするところに特色がある。この一連のプロセスを成人教育の観点から解明していく必要があり、そうした事例はイギリスには歴史上たくさんあるというのである。そして日本にはそうした例が大学人などに見られないとも指摘している。この指摘は 2002 年の論文に書かれたことであるが、1998 年に書かれた、大正期に広がったイギリス流の労働大学やセツルメントを研究した論文では、日本にもイギリスで見られたのと同じようなタイプの学者や知識人がいたことをあげておられた。

筆者は、かねてから末広や穂積、我妻を高く評価し、彼らこそは大学人による生涯学習指導の手本と考えている。アカデミズムの中で評価される業績を量産し、しかも民衆・市民の法律理解を深めるための啓蒙活動に力を注いだ。彼らの卓越した知的能力がそれを可能にしたことは明らかであるが、彼らの志の高さを欠いては、とてもなしえなかったであろう。…… やたらに公開講座の数を多くすることではなく、講義・講演の内容、その質についての反省と改革に努めることを志向すべきである。⁽⁸¹⁾

ここにあげられている末広厳太郎や穂積重遠は東京帝國大學の教授であったし、賀川豊彦の社会活動を思い出すと、わが国にも R.H. トーニーや G.D.H. コールなどに比肩される良心的知識人がいたことになる。相庭和彦は、ここに紹介した文章と同じ箇所を引用し、「大学を中心として形成された「知」の市民社会への広がりが成人教育の展開過程であり、それを支えていく知識人が生涯学習の実践者としてみなされ、評価対象とされる。これは宮坂がイギリス成人教育史の研究から学びとった視点である」⁽⁸²⁾と指摘しているのは、げに正しい。

次に、テーマの見つけ方では、労働者教育史のうち、新しい出発点を記すところ、即ち協同組合ではロッヂデール公正先駆者協同組合、W.E.A.の結成、N.C.L.C.の発足など、それぞれの発生史を取りあげられていることが重要である。発生史を重視するのは、この時期には理念をめぐる論争があり、次いで運営をめぐる甲論乙駁があつて一定の原則が成立することになるからで、それ以降では団体の設置目的が果たされた、あるいは使命が終わったというときまでは、マイナーなチェンジしかないからである。労働者教育を近代的な協同組合運動に着目されたのも適切であった。ロッヂデールでの協同組合の組織化は 1844 年のことであるが、先にも述べたように、協同組合は大学拡張運動でも W.E.A.運動でも常に強力な支援団体であったから、地方における両運動の受け皿であり、協同組合の理念や教育方法も両運動に少なからぬ影響を与えたからである。大学拡張運動を始めたスチュアートは、協同組合逍遙大学提案を提出したこともあるし⁽⁸³⁾、ことあるごとに協同組合や労働組合との連携を問題とした。このように労働者教育史において協同組合を重視することは大事であるが、それにも増して重要なのは大学拡張であった。成人教育において大学拡張の重要性は講座を定型化したことにある。これは、17 世紀の科学革命に源泉を持つ「知の学習」の伝統を継承発展させた大人の教育であつて、

この講座方式が協同組合、ラスキン・カレッジ、W.E.A.や N.C.L.C.での教育の方法として採用されていたからである。宮坂さんの大学拡張(運動)の理解は概して正確であったから、マンズブリッジの W.E.A.の企画も正確に理解されている。逆に、大学拡張講座のことが正確に理解されていなくて、イギリスの成人教育史のことを論じれば、論文に誤謬が入り、間違っ了解釈をたくましくすることになる。

宮坂さんのイギリス研究では、従来日本では知られていないことがたくさん取りあげられている。協同組合運動の論文ではホリヨークの協同組合教育論なども、成人教育の人でも知る人は少ないのではなかろうか。また、ラスキン・カレッジにおける「学生叛乱」の論文も他に例がないくらい詳しく事件の推移を実態に即して、発生の原因を明瞭に描かれた。宮坂さんにとってこの事件は、プレブス・リーグ、セントラル・レーバー・カレッジ (C.L.C.) ができて N.C.L.C. に発展していく起点になる事件であったので特に力が入ったと思うが、イギリスでも提供された講座まで踏み込んで論じたのは珍しいと思われる。

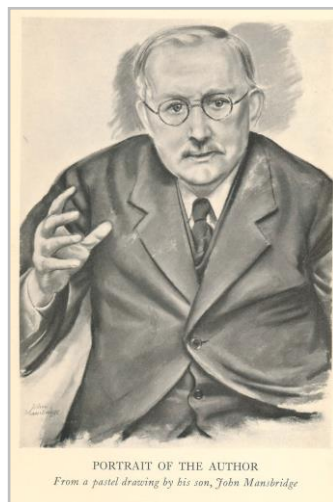


写真12 Albert Mansbridge

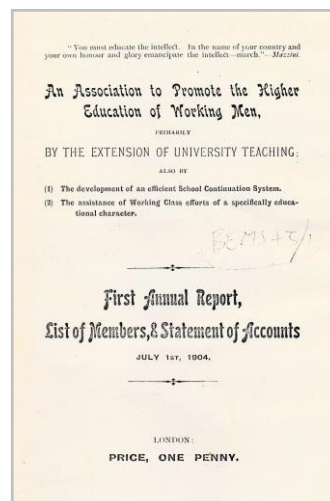


写真13 W.E.A., The first Annual Report. 1904

宮坂さんのイギリスの研究論文のなかで注目されるのは、Albert Mansbridge の論文である。この論文は、「その 1」と「その 2」から成り、それぞれに「まえがき」がある。「その 1」の「まえがき」は碓井正久教授の退官への献辞であり、「その 2」ではわが国でのイギリス労働者教育の先行研究が吟味して書かれている。本論は全部で 45 頁もある大作で、マンズブリッジがどうして W.E.A. という労働者教育協会を作ろうとしたのか、テュートリアル・クラスが実際にどのようにして協会の事業として定型化されていたか、またマンズブリッジの成人教育観はどのようなものであったかを分析した力作であった。この論文の白眉はテュートリアル・クラスの定型化の論証である。マンズブリッジがどのように構想していったのか、サポートした人たちは誰か、このクラスの開始がどのような意味を持つと研究者たち (B. ジェニングや R. フィールドハウス等) は判断したか、同時代に先駆的な事例があるというウェルチ等の事例提示に対してどのように考えるかといったことを取りあげて、テュートリアル・クラスの成立を多面的に論じている。特に W.E.A. の年報 (第 1, 第 4, 第 7-11 年) を読みこなし⁽⁸⁴⁾、オック

スフォードの大学テュートリアル・クラス合同委員会議事録からテュートリアル・クラスの定型化の過程を明らかにしようとしたことは特筆に値する。

「Albert Mansbridge と初期 WEA の形成」は、大学拡張の新しい事業形態が生まれたことを叙述する時には、事業方針、講座内容、講座運営等について教授会や理事会での議事録から調べるのが重要であることを示している。このような研究態度はイギリスでの大学拡張史研究では通常のことであるが、わが国の大学開放史の研究や個別の大学の大学開放史の叙述においてはほとんど見られない。イギリスの大学拡張史研究での中心テーマは、講師の選定や講座内容、受講生の学習成果などに置かれるが、わが国ではそうしたことがどこで審議され、どのような深い議論がされたかというようなことは、ほとんど研究者も関心がない。こうしたことも示唆していることも、本論文の価値として指摘しておかねばならないことである。この論文には政府や役人は登場せず、大学人、聖職者、労働者代表といった多くの人々がマンズブリッジの企画を実現するために協力する姿が描かれている。宮坂さんは、原資料を読み、事実を確定し、そこから歴史像を構築することが歴史研究のまずすべきことだといわれていたが、それを実際に示されたのがこの論文であった。イギリス成人教育学の碩学であるトマス・ケリーの実証主義を越えて、その発生史研究から得られた解答をもって、今日的な社会的課題に照応して社会的な意味を明らかにしようとしたのも、イギリス人の水準と同等もしくは越えた論文であると評価できると思う。

おわりに

顧みるに、私が学に志すようになり、研究を仕事にするようになったのには、実に多くの人に教えを受けて育ててもらったことに気づく。しかし、研究者というのは、自分で課題を見つけ、それを解こうとして材料を集めて読んで考えるということを日夜しているもので、その進捗状況を他の人に滅多に話したりすることはないものである。それゆえに、このエッセイの最初にベーコンの献辞を紹介したように、人生で「研究を知らせ合うという絆」を持った学友を2人も得たのは、幸せという以外いいようがない。

「宮坂広作」学習会で発表した後、なにか物足りなく思い、宮坂さんの著作や私とのやりとりの手紙などを見直してみた。最初の問題は、宮坂さんと私とが出会った最初はいつのことかという遠い過去のことであった。このエッセイを書く間にその問題も解決したが、その後、宮坂さんとの話で話題になったことなどを思い出して、それぞれの時に先生はどのように考えていたのかなども知りたくなって著作や論文、書簡なども見返すことになった。通常の論文では、研究者の絆を説明しきれないのでこのようなエッセイにしてみたが、この仕事を終えてみての感想を最後に述べておくことにしたい。

第1は、宮坂さんが研究者として過ごされてきた生涯には、研究者としての悩みが常にあったことを知ることができた。大学院生からイギリス留学までの期間における最大の悩みは、社会教育史研究の歴史研究の方法論であった。この悩みが解消されたのは、イギリスでの在学研究で思いきり原資料にあたって研究してからである。その次に出てきた悩みは、ハッキリ述べられてはいないが、研究の継承の問題ではなかったかと思う。宮坂さんは、イギリスから帰国

後、玲子夫人にこれで5人ぐらい学位が出せると言われていたと聞いたという。持ち帰られた資料を見ると、協同組合、労働者教育、マンスブリッジ、チュートリアル・クラス、労働カレッジなどは、それぞれ博士論文のテーマになるものがある。宮坂さんが帰国されたとき50歳であり、新進気鋭の教授として最も働き盛りの時代に入る時期であったからそのような院生が出てくることを期待されていたにちがいない。ところが、5人はおろか、たぶん1人もこれらのテーマを我が物にし研究して博士論文にする院生は現れなかったようである。その理由として、宮坂さんは、大学院修士課程（前期課程）の院生を対象にした「19世紀におけるイギリスの成人教育」という授業の概要を公表された論文の中で、次のように述べられている。

筆者がこのテーマで講義をしなかったのは、院生たちがすでにそれぞれ固有の研究テーマをもっており、それに取り組んでいくうえで共通に関心をもて、より必要なテーマ（たとえば「社会教育学研究方法論」）が他に存在したからである。あえてイギリス成人教育史を講義して、院生たちの回心・改宗を実現するような自信はなかった。大学院を指導する教員の中には、自分の研究テーマを院生に押しつけ、それとは違うテーマで論文を書こうとすれば破門だと脅迫するような横暴な輩もいる。院生を無給の研究助手として駆使するかわり、就職などの世話は熱心にしてシュレーを形成するのである。筆者の忌むふるまいである。こうしたスタンスの当然の報いとして、このテーマでの研究後継者をもつことができなかった。学燈の滅びることを憂えて、拙論を起草するゆえんである。⁽⁸⁵⁾

「19世紀におけるイギリスの成人教育」という講義（あるいは特講）は、若い研究者を育てて行くときの苗床であると思うが、それができなかったというのは、本エッセイで描いたような、社会教育史の研究手法論での苦闘を伝えることもできなかったということでもあり、とても残念なことと思わざるを得ない。このことは何もイギリス成人教育史研究だけではなく、宮坂さんが開拓された社会教育学の分野、たとえばわが国における協同組合、労働学校、自由大学運動等々、民間での成人教育の分野でそれぞれ専門家が育ってくれるかどうかにもかかわることであった。いまだにこうした民間生涯学習の分野の研究が未熟なのは、宮坂さんの研究の継承がうまくいっていないということだと思う。否、宮坂さんが不在になったため、社会教育史の研究や理論化が後退していると思う。

宮坂さんの研究は、日本の社会教育学を構築することに費やされた、ということもいっておきたい。宮坂さんは「わが師はなにわさを、なしたまいしか——宮原誠一教育論集第六巻に寄せて」という論文を研究室紀要に掲載された。「わが師」宮原誠一教授と宮坂さんとの師弟関係は生涯にわたって続く強いものであり、宮坂さんは教育学の教授のなかから宮原教授を自ら選び取ったといわれている。この部分は大事なので、その理由をここでも確認して起きたい。

宮原先生には、大学院入試の面接ではじめてお目にかかったのだが、それ以前に先生の著作の多くを精読して、この先生こそと確信したのである。教養学科で、英国社会思想史など、多少社会科学に関心を持ったことがそういう判断の根拠であったろう。先生と問題意識を共有できるというのは、弟子にとってこの上ない幸せというべきである。イ

デオロギー的にもなんら違和感はなく、先生の思想と実践に共鳴しえた。先生は自分たちよりはるかに、先を歩んでおられる、自分はそれに信従すればよいのだと考えて、大学院時代を送った。⁽⁸⁴⁾

宮原教授が日本に社会教育学を構築するためには、日本の近代社会教育史を発掘することと、イギリスの成人教育史の比較研究を行うことである、と述べられている。初代の教授が示す方針としては、実面的確であったと思う。前者は宮原教授のゼミで近代日本社会教育史のテーマで取り組まれたのが始まりであるが、このテーマの分野で、大学院、それに続く大学の講師・助教授時代と、ずっと継続的に研究を重ねてきたのは同じゼミ生の中でも、宮坂さんだけではなくかと思われる。後者のイギリス研究のススメも宮原先生の示唆が宮坂さんの研究に効いている。宮原教授はノッティンガム大学に留学して、イギリス成人教育の「知的・系統的な学習組織」⁽⁸⁷⁾の厚さに驚き、「私にはなんといっても大学と労働組合の関係がいちばんうらやましい」⁽⁸⁸⁾とすら書いておられる。宮坂さんの東大教授時代の研究は、イギリス労働者教育、わけでもラスキン・カレッジ、W.E.A.、N.C.L.C.の左右の労働者教育運動などに集中しているのも、宮原教授の示した方向で研究されたといえる。宮原教授がイギリス成人教育を言われたのは、成人教育史研究の方法を理論分析をわが国に持ち込んで、社会教育学を構築することにあつたが、それも含めて宮坂さんはイギリス研究をされた。こうして見ると、宮坂さんの社会教育研究は、師である宮原教授の示した方向に沿って行われたというのがわかる。宮坂さんは、「わが師はなにわざを、なしたまいしか」という論文の冒頭で、「筆者は、研究室の三代目の責任者として、研究室の伝統を後代に継承してもらうように努力する義務があり、そのための一つの方法として本稿を執筆している」⁽⁸⁹⁾と述べられていて、講座の開祖である宮原教授の社会教育の研究意識を伝統の始まりと理解して生涯にわたり研究をされたのがわかる。この意識を脱却されたのは、山梨学院大学に移ってからの新しい生涯学習に入られてからだと思われる。

この段でぜひ言及しておかねばならないのは、宮坂さんが『英国成人教育史の研究 II』の「あとがき」の冒頭において、もしイギリス成人教育史の研究に生涯専念していれば、本書の水準を超える仕事ができただろうかも知れない、という思いについてである。在学研究1年間であれだけのイギリス労働者教育史の研究成果を出されたことを思えば、水田洋教授(1919年—)のイギリス近代社会思想史研究や、都築忠七教授(1926—2020年)のイギリス労働運動史研究と並び称されるような、イギリス労働者教育史研究の大家になられたに違いないと思う。

第2は、私の学位論文及びスチュアート伝の刊行について報告しておく必要がある。どちらも学友の2人から強く勧められ、うんうんといいながらまだ刊行していない。学位を取得した後、宮坂さんを訪ねて論文を見てもらい、読んで良くできているという評価をいただいた。また同年の夏にはカナダのイエローナイフに住んでおられたウェルチさんを初めて訪ねて論文を見ていただいた。論文は日本語で書かれているが、英文の抄録をつくり審査資料等も持っていた。この時は2週間も居候していたので、いろんな話が出た。論文については非常にいいという評価で、英文で出版することを強く勧められた。出版先はケンブリッジ大学出版部を筆頭にあげられ、自分が責任を持って推薦し実現したい、気にくわないだろうが分量が大きいので

減らして欲しい、英文への翻訳は自分がみる、口絵にはスチュアートが最初に行った 1867 年リヴァプールでの女性講座のシラバスの写真を載せるのはどうか、ケンブリッジ大学出版部が執筆者に配る引証の手引書はこれである、これに準拠して引用を書いて欲しい⁽⁹⁰⁾、ということをお願いされて、そうします、ということになった。帰国してしばらくすると、緒言にあたる文章を書いて送って下さった。この訪問ではもうひとつ話があって、以前から約束してきた近代大学拡張運動の創始者ジェイムズ・スチュアートの伝記を作ることで、役割分担を決めて計画的に資料を発掘することも打ち合わせをした。

ウェルチさんが強く英文での出版をするようにといわれたのは、私の論文が、彼の著書、*Peripatetic University* の研究を継承発展させたものだと思われるからだと思う。ウェルチさんはケンブリッジの大学拡張 100 年史を書かれた。その次は成立期で 20 年ぐらいをあつかう研究書が出て来る、そしてその跡は 5 年ぐらいの期間を集中して発生史研究が出てくる、というように純をたどると仮定すると、大学拡張史研究で第 2 の成立史のところが抜けていることが解る。しかし、研究を進めていると、大学拡張教育を成立させる「知的学習」はベーコンに遡ること、その祖型は 18 世紀の科学の巡回講師にあることなどを解明する必要があると強く考えるようになって、英文で刊行することも引っ込めることにした。今述べた部分は、学位論文の作成時に一章分をとって書かれていたのであるが、審査委員会で近代の大学拡張だけに絞るようになると言われて削除した部分なのである。どうしてもこれを解明したいと思って、その後 20 年近くもこの研究にかかってしまうことになった。この間にウェルチさん、次いで父母、そして宮坂さんまであの世にいつてしまったが、若いときの決心は変わらず、業の深さを自ら感じる。スチュアート伝は、ウェルチさんが亡くなった後に、宮坂さんに国内での出版を考えられないだろうかとの相談があった。宮坂さんからは 1 年後ぐらいに返事があり、某大学出版部と話を進めている、どうしますかと連絡がきた。その時は、17-18 世紀の「知的学習」の研究にのめり込んでいた最中であつたので、今は遠慮します、ということになった。もともと名声を得たいとか、シュレーを作りたいとかという野心が薄い人間だと自らを知っているから、なにがなんでもださねばならぬなどとは思っていない自分もよく知っているから、両書とも 80 歳を超えてから出版されるだろうとはいえるが、自信があるわけではない。

第 3 は、「宮坂広作」学習会が開かれたのは、宮坂さんの社会教育・生涯学習の問題意識や研究法を継承・発展したいという研究者の気持ちと、郷土の不出世の学者を顕彰したいという二つの願望で開かれたのではないかと思う。ここでの一番の問題は、宮坂さん自身が書いておられるように、イギリス成人教育史の分野での「研究後継者をもつことができなかった。学燈の滅びることを憂える」というところにある。このエッセイを書くために、宮坂さんの薫陶を受けた教え子たちが集まってそれぞれが思い出や影響を受けたことなどを書いた冊子があつたことを思い出して、永井健夫センター長にお願いして、掲載誌の『山梨学院生涯学習センター研究報告』第 27 輯(2014 年 2 月)を送ってもらった。この研究報告の「宮坂社会教育論の再検討」に載せられている記事を読んで、宮坂さんが書いている「学燈の滅びることを憂え」という意味を深く考えさせられた。先人たちは、社会教育を学に構築していくときに、日本の社会教育史の遺産から住民が相互に交わって自由な学習を進める理念や原理を抽出していくことがいかに難しいかを十分に認識していて、戦後における民主的社会教育の原理をイギリスの成人教育

史から抽出して社会教育を一変しようとした。なぜそんなことを戦後にしようとしたのか、と考えさせられた。本エッセイも最後にさしかかっているので、少し明治の文明開化期を見ておきたい。

明治4(1871)年に中村正直は『西国立志編』を出版し100万部という驚異的な売りあげをした。この本は、英人サミュエル・スマイルズが1859年に書いた *Self-help* の翻訳である。明治5(1872)年には福沢諭吉が『学問のすすめ』を出版し、これも広く読まれた。寺子屋や藩校を近代的な学校に変え、その教科内容も西欧に範をとって子どもの教育が進められた。大学の分野では、明治6(1873)年に東京に工部大学校が作られ、その校長にはグラスゴーからヘンリー・ダイアーが就任し、最新式の工学教育を始めた。札幌農学校が明治9(1876)年に、東京大学が明治10(1877)年に創設され、これらも欧米の事例に範を取って内容も教授陣も整えられていった。このような進捗状況をみると、1860年代末から70年代の日本の社会と、同時期のイギリスはずいぶん似た社会状況にあったということがわかる。イギリスにおいて初等教育法が通ったのが1875年、大学に工学部を作るのはケンブリッジ大学で1875年、その工学教育の設計者はスコットランド出身のジェイムズ・スチュアートであった。私らに関係した成人教育でいえば、なんといってもスマイルズの著作の影響が大きかった。この本の第十一編には、次のようなことが書かれている。

勤勉の功を積まずして、容易に得るところの知見は、算して教養の道とはさず。かくのごとき知見は、心中に居所を占むれども、人心をして富潤ならしむることあたわず。一時英敏の才を生ずといえども、元来特に樂趣に供する目的をもって学習をなすゆえ、堅基を崇くし、実益を獲ることあたわざるなり。かくのごとき知識は、心霊の領悟にあらずして、特に五官の感覚および食色の快樂に似たるのみ、時過ぐれば跡なく消滅すべし。

(91)

イギリスで大学拡張講座が始まったのは1873年からであるが、講座ができたのは国民がそれを受け入れる用意ができていることが必要である。そうした精神的な回転をさせる狼煙を上げたのがスマイルズの本であった。イギリス人も、大人が学ぶというのはこうなのだ、気晴らしではないのだ、と成人は自覚したのである。高等教育を整備することはイギリスも同様であった。1871年の大学宗教審査法の廃止は、国教徒以外の人にも大学を開放するということで、大学に於ける四民平等の宣言に等しいことであった、同時に大学を中心として高等教育機関を作っていくというのも1871年以降に急速に広がっていった。イングランドにはオックスフォードとケンブリッジしか教授大学はなかったから、産業界の需要に応える市民大学を大都市に作るのが急務であった。大学拡張運動との関連で生まれた第一号がブリストルのユニヴァーシティ・カレッジであった。こうした動きの触媒になったのは大学拡張講座であった。民衆はこの講座を熱狂的に受け入れ、講座から市民大学を各地の産業都市に作り出していくことになった。この時期にわが国でも『西国立志編』が熱狂的に受け入れられた。『西洋立志編』に溢れた自立自助の精神で学ぶ国民を作るために、成人教育を一気にイギリス流に換えればよかったのであるが、政府はそうはせず逆に大教宣布運動に走ってしまった。これが戦前の社会教育の性格を形作ることになった。

この明治初期の国づくりでイギリス流の成人教育、わけても大学拡張講座が導入される可能性がちらっと見えたことがあった。それを知ると、残念なことこの上ない気持ちに陥るのであるが、その経緯を書いておきたい。西岡幹雄の研究は、ケンブリッジ経済学派の祖アルフレッド・マーシャル (1842-1924) を取り上げ、新古典派の経済学が成立し、その「経済学」が大学拡張運動で講座としてどのように受容されていったかを解明する論文である⁽⁹²⁾。マーシャルはセント・ジョーンズ・カレッジの出身で、同カレッジのフェローの時に「経済学」を講義していた。結婚をしたのを契機にカレッジを辞めてブリストルのクリントン・カレッジに勤めていたが、同地にも大学拡張運動の影響を受けてユニヴァーシティ・カレッジが作られることになった。この時の学長審査委員の一人にスチュアートがいた⁽⁹³⁾。1875年頃から産業都市に市民大学を作るというブームが起こるのであるが、そういう場合にはたいていスチュアートが相談相手になることが多かった。1877年、学長はマーシャルに決まったが、スチュアートの行っていた大学拡張運動では「経済学」の講座に人気が高かったので、マーシャル夫妻に拡張講座「政治経済学」のテキストになるような本を執筆してくれるように頼んだ⁽⁹⁴⁾。それが『産業経済学』(*Economics of Industry*, 1879年) である。

ここにもうひとり、大事な人物が登場する。それは、マーシャルがケンブリッジで「経済学」を教えていたときの学生、H.S. フォックスウェルである。フォックスウェルは同カレッジのフェローになり 1879年度にはロンドン協会で「政治経済学」の講座を担当した。次いで 1881年にはロンドン大学ユニヴァーシティ・カレッジの「政治経済学」の教授となったが、同協会の「政治経済学」の拡張講座を継続して担当していた⁽⁹⁵⁾。ロンドン協会でのフォックスウェルの拡張講座はスチュアートの裁可があって始められたはずなので、スチュアートは、彼のこともよく知っていた。そのフォックスウェルに、1887年にスチュアートから手紙が届く。スチュアートの書いた手紙には、東京商業学校教授兼政府の経済顧問となれる人材を求めている、待遇は一年千ポンド、雇用期間は3年間で適当な人を探してくれるように依頼された。だれか適当な人を推薦してくれないか、という内容であった⁽⁹⁶⁾。マーシャルも相談を受けて適当な人材を何人かあげた。そのうちの一人は、ウィリアム・カニングムであった。カニングムは、スチュアートのもとでケンブリッジの拡張講座の講師を勤めていた。日本側では受け入れる側に三井物産の益田孝がいて、東京高等商業学校の教授にフォックスウェルがいいと判断して交渉に入った。井上琢智の研究では、益田孝は、「当時、「公開講座」の講師であったフォックスウェルに政府経済顧問・東京商業学校 (Commercial College) の教師就任の声をかけたことになる」⁽⁹⁷⁾と書いている。この人事の窓口はスチュアートであるから、もしフォックスウェルが東京高等商業学校の教授になれば、「経済学」の講座を開くようにさせ、大学と公開講座はセットで行うものだという指導がされたと予想される。この時のスチュアート、フォックスウェル、マーシャル、三井物産の益田孝の書簡の現物は、関西学院大学の所蔵する〈フォックスウェル文書〉に含まれている⁽⁹⁸⁾。フォックスウェルは自ら日本への赴任も検討したようであるが、明治14年の政変による日本のドイツ志向への変化で結局実現しなかった。このことについては井上琢智教授の研究で明らかになっているが、大学拡張そのものに精通しているフォックスウェルが来日していれば、日本にも大学拡張が本格的に導入されることになっただろうと想像されるだけに、惜しまれることであった。ちなみにフォックスウェルの弟アーネストはケ

ンブリッジで経済学を修め、1896年4月～99年7月の間、東京帝国大学の経済学の教授を務めた⁽⁹⁹⁾。

少し話が横道にそれたが、私がいいなかったことは、戦後になぜイギリス成人教育史研究をしなければならないと考えたのかということで、その回答は明治の文明開化期に欧米流の大学を作る時にセットで大学拡張も入れて国民の成人教育を一気に刷新しておかなかったからだと考えるからである。このことをよく自覚していた宮原教授や名古屋大学の小堀勉教授たちは、若い人たちにそれを期待しており、そうした声援を背に受けて宮坂さんもイギリス研究に励まれたと思われる。このような学問志向は、日本の社会教育学を構築することに責任を感じている東大の宮原研究室を中心に根強いものであった。東大社会教育学の学燈ともなっていたイギリス成人教育とのつながりが実際に切れたというのを宮坂さんに自覚させたのが、若い人にこの学燈を継ぐ人がいないと知ったときであったと思う。「知の生涯学習」を考える根を断ち切ってしまうと、国内の社会教育史からそれを身につけることは不可能に近いと思われた。自助の精神、啓蒙思想、協同組合教育、大学拡張、講座、セツルメント、チュートリアル・クラス、労働学校などの成人教育はイギリスが発祥であり、日本の社会教育に根を下ろしている。そうした基礎教養がなければ、宮坂さんが「近代日本における労働者教育の遺産——とくに大学の関与と労働学校について」（『山梨学院生涯学習センター研究報告』第3輯）において取り上げられた大正・昭和前期の労働学校やセツルメントなども、私たちの社会教育遺産から消えて行くだろう。こうした事情を悟っていた宮坂さんは、大いに失望されたのではなかろうか。在外研究で多くの文献資料を持ち帰られたが、宮坂さんも意気込んでそれらを分類整理する気にもならなかったのかもしれない。

「宮坂広作」学習会のお陰で、私もイギリス成人教育史の文献資料を形見分けで先生の残された書籍をいただくことができた。耕平君が亡き父君の社会教育やイギリス研究に生涯をかけた気持ちを思いやって、できるだけ多くの研究者や人々に役立つようにと、奮闘努力して整理してくれたお陰で私も貴重な資料を得ることができた。古書店の小僧ぐらいに洋書の目利きはできるので、一冊1万円以上する洋書もたくさんいただいた。今後の予定を耕平君に聞くと、一年以内に処分しますとのことであった。単行本は古書店でも引き取ってくれるかもしれないが、時間とお金をかけてコピーをし、それぞれに出典を記入されて積み上げられた書類については現実には引き取り手がなく、たぶん焼却炉に行くのかと思うとつらいものがあつた。

読者にこのコピーしたものがお金に換算するとどうなるか、紹介しておこう。先日、広島大学の図書館に行き、19世紀の雑誌に掲載された論文を頼もうとしたところ、それをオックスフォードやケンブリッジ等の図書館からコピーでもらおうとすると、A4一枚のコピーが千円になります、いいですか、といわれた。一論文で15枚ぐらいコピーをお願いすると、1万5千円もかかるというのである。本当ですかと何度も念を押したが、そうなのです、とのことで不急のことゆえコピーをすることはやめることにした。宮坂さんのところに積んであったコピーのうち100年以上前の文書から取ったコピーがどれぐらいの分量があつたか知らないが、2000枚あつたとしたら200万円ということになる。200万の価値を持つには、それぞれの資料に、資料の属性（所蔵図書館、仮製本、分類記号）を記しておいて、使えるようになっていることが必要条件となる。宮坂さんもしまいには、文献資料の行方がどうなるかは考えなくなつたに

違う。私のゼミ生には、引証の作法を徹底して教え、宮坂さんとは逆に、いかにイギリス研究で苦労したか、そして研究上での交際が楽しかったかを授業でよく話したものである。彼らが指導教授の研究の労苦を自分の研究に活かしてくれているのを見ることができるのは嬉しいことであるが、それでも一人もイギリス研究者が育たなかった。宮坂さんや私らのところでイギリス研究者が育たなかったのに、お茶の水女子大学の小川剛教授のところは育っていた。難しいものである。

宮坂さんの晩年では、2007年6月17日に諏訪市の角間新田に娘2人を連れてご機嫌伺いにお寄りしたことがあった。これは滅多にない家族サービスで上高地に行き、白骨温泉、諏訪大社に詣でて、角間新田のご自宅に伺ったのであるが、娘たちに会えたのを喜ばれ、子どもの頃のことや高校時代のお話をお聞きした。先生との出会いでは、2008年に新橋で定期的に開かれていた「フィナンシャルカウンセリング研究会」が最後かと思う。同年12月に、来年3月で退職して郷里に帰ります、最終講義が2月28日に開かれます。講義の題目は「すぎの戸をあけて——町々の歴史探訪による生涯学習」です。近く案内が届きます、という手紙を出したところ、12月16日付けの返書で、このところ健康は非常に良くなかったがやっと少し回復した、2月28日の最終講義に出たいけど、その時の容体次第であると書かれ、私が郷里に帰るとするのは、深い意味があると理解しているというお手紙をいただいた。年が明けて2月28日の最終講義の前に、『生涯学習フォーラム』最終巻に載せる原稿「茫たり交遊四十年」とともに、欠席代わりに、郷里に帰る「友」に対して餞の歌五首が同封されて届いた。

宮坂広作 詠 「友へ はなむけに五首」

四十年の交り長きこの友は 学びの道の縁深かり
廿の都のくらしふりかえり 悔なかるべき友を羨む
この世をば照らす光の聖くして わが友の生ゆたかにぞある
父母の塚守らんという友よ すこやかにあれ生命永かれ
なつかしきふるさとを恋ひひたむきに 杉の戸開く君よ幸あれ

(2009年2月14日付け書簡)

その後、私との間では4月16日付けで、山梨と長野の高校校歌を集めることの依頼があった。宮坂先生の晩年、病床での歌に、

かねてより この世は虚仮と悟れども 友の情けに涙こぼるる

というのがあった。学問の世界でも功名争いをする虚仮の世の中で真の学友を2人も得たことは、人として生まれて研究職を選んででもたらされた幸せであった。広島には円隆寺に赤穂義士のひとり、原惣右衛門のお墓がある。惣右衛門の辞世は「かねてより君と母とにしらせんと 人よりいそぐ死出の山みち」である。親を喪ってからは、この歌が永井建子の「月下の陣」に代わって心を占めるようになった。この歌の「君」とは、私にとっては宮坂さんとウェルチさんである。お2人に、日本がスチュアートになにか手出ししたそうですよ、といえ、さぞや驚くに違いない。もっと詳しく説明できるように、あなたのこの世での修行はここまで、といわ

れるまで研究しておかねばならないと思う次第である。

注

- (1) 相庭和彦「戦後日本社会における社会教育論に関する考察——宮坂広作の社会教育論を手掛かりに」『新潟大学教育学部研究論文集』11 (2) (2019年3月)、159-171頁。
- (2) 『ベーコン随想集』渡辺義男訳(岩波文庫、1983年)、13頁。
- (3) 宮坂広作「生涯学習の遺産発掘と生涯発達史研究——社会教育史家の懐古と展望」『生涯学習フォーラム』5 (2002年3月)、3頁。
- (4) 宮坂広作『英国成人教育史の研究Ⅰ』(明石書店、1996年)、377-378頁。
- (5) 同上書『英国成人教育史の研究Ⅱ』、427頁。
- (6) 香川正弘・宮坂広作編著『生涯学習の創造』(ミネルヴァ書房、1994年)、315頁。
- (7) 宮坂先生は「ロバート・オウエン論」を卒業論文として提出したと書いている。
宮坂広作「生涯学習の遺産発掘と生涯発達史研究——社会教育史家の回顧と展望」
『生涯学習フォーラム』第5巻(2002年3月)、3頁。宮坂朋幸氏が東京大学駒場図書館情報サービス係から得た情報では、卒論題目は *Herbert Spencer. On the History of Scientific Movements in Education* であるということであった(宮坂朋幸氏から筆者へのメールでの報告、2019年7月23日)。現在このイギリス分科は、東京大学教養学教養学科地域文化研究分科イギリス研究コースとなり、その卒論執筆言語は英語、卒論リストの No.15 に宮坂先生の論文題目が掲載されている。
(<http://british-section.c.u-tokyo.ac.jp/Theses/past.html>)。ゆえに、卒論題目が「ロバート・オウエン論」というのは宮坂先生の記憶違いである。
- (8) 宮坂先生が大学院で教育学に進学することを決めることに影響したのは、旧制諏訪中学の先輩である長田新先生の話に感銘してという話も聞いたが、本人は上原専禄先生の助言によったという。また、宮原誠一に師事したことについては、「宮原先生をわが師として選びとった」といい、先生の専攻が社会教育学だったから、先生のゼミに属することになったと書いている。宮坂広作「わが師はなにわぎを、なしたまいしか——宮原誠一教育論集・第六巻によせて」『社会教育学・図書館学研究』13 (1989) 68頁。
- (9) 宮坂「わが師はなにわぎを、なしたまいしか」73頁。
- (10) 同上論文、57頁。
- (11) 同上。
- (12) 宮坂広作「Albert Mansbridge と初期 W.E.A.(その1)」『社会教育学・図書館学研究』7 (1983年)、20頁。
- (13) 宮坂「生涯学習の遺産発掘」、1頁。
- (14) 宮坂「わが師はなにわぎを、なしたまいしか」、57頁。
- (15) 小川利夫・島田修一編『宮原誠一教育論集第2巻 社会教育論』国土社、1977年、15-18頁。
- (16) 宮坂「Albert Manbridge と初期 W.E.A.(その1)」、20頁。
- (17) 小川利夫・倉内史郎編『社会教育講義』(明治図書出版、1964年)、36頁。
- (18) 宮坂「生涯学習の遺産発掘」、9-10頁。
- (19) Robert Peers, *Adult Education: A Comparative Study* (London: Routledge & Kegan Paul,

1958; Thomas Kelly, *A History of Adult Education in Great Britain, from the Middle Ages to the Twentieth Century* (Liverpool: Liverpool University Press, 1962); J.F.C. Harrison, *Learning and Living 1790-1960: A Study in the History of the English Adult Education Movement* (London: Routledge & Kegan Paul, 1963).

このうち宮坂先生が最も影響を受けたのは、ピアーズの著書であったと思われる。

- (20) 宮坂先生はピアーズの『成人教育』を購入したときのことを次のように書いている。
「近代日本社会教育史の研究に没頭しつつも、英国成人教育史研究への関心はずっともちつづけていた。R. Peers(ノッティンガム大学教授、英国において成人教育分野で初めて教授になった人物) の *Adult Education: A Comparative Study* の購入に大枚を投じ、新婚直後の家計に大穴をあけた記憶はなまなましい」と。なお、留学中にピアーズ夫人から教授着用のガウンを贈られ、山梨学院大学時代の儀式では大学でそのガウンを着用した、と書かれている。宮坂広作「生涯学習の遺産発掘」、7 頁。
- (21) 碓井正久先生の在外研究については、上杉孝實先生にご教示いただいた。
2020 年 6 月 16 日。
- (22) 上杉孝實「イギリスにおける大学成人教育の変遷——ノッティンガム大学成人教育部の事例」『UEJ ジャーナル』19 (2016 年 4 月)、16—21 頁。上杉教授はノッティンガム大学に 1982 年 4—12 月、また 1991 年 8—10 月の期間留学されている。
- (23) 宮坂広作編著『額の汗を野にそそぎ——父母の記』日本生涯学習研究所観山堂、1992 年、25 頁。
- (24) 宮坂広作編著、23 頁。「額の汗を野にそそぎ」という詞の出典は、聖書の創世の書、3・19。「額に汗を流す」は、『ベーコン随想集』、159 頁にも出てくる。宮坂先生の愛唱歌「藝文の花」(明治 43 年第 20 回記念祭寮歌)の歌詞は次の通り。また、歌は <http://yoshida.justhpb.jp/Bgeibun.html> で聴くことができる。「藝文」は学問と文芸を意味する。蛇足ながら、私も若いときから郷里の音楽家永井建子作詞作曲の「月下の陣」を人生の戦闘歌としていた。

- | | |
|---------------|-------------|
| 1、藝文の花咲きみだれ | 思想の潮湧きめぐる |
| 京に出でゝ向陵に | 學ぶもうれし、武蔵野の |
| 秋の入日はうたふべく | 萬巻の書は庫にあり |
| 2、降りつむ雪にうづもれて | 春を営む若草の |
| わかき心を誰か知る | なべての眠りさめぬとき |
| 眞闇の中に人知れず | 鳴く鶏を誰か知る |
| 3、あゝ薄暗き櫳の根に | 友と理想を語りてし |
| 三年の夢は安かりき | さながら今は長江の |
| 河口間近くわだつみの | 荒浪をきくわれ等かな |
| 4、などか恐れん諸共に | いざ戦はん我父は |
| 額の汗を野にそそぎ | 我が兄はまた舟に乗り |
| 勇魚とるべく行く見れば | 戦ならぬものやある |
| 5、いそむ窓に植えおきし | 櫻も今は丈のびて |
| 若き二十となりけり | その紅の花かげに |

灯かゝげうちつどひ 今宵は語り明かさんか

- (25) 同上書、2 頁。
- (26) 同上書、23 頁。
- (27) 宮坂「生涯学習の遺産発掘」、13 頁；同「生涯学習と自己形成」『大学改革と生涯学習』13(2009 年 3 月、13-39 頁参照、
- (28) 宮坂「生涯学習の遺産発掘」、13 頁。
- (29) 香川正弘・宮坂広作編著、315 頁。
- (30) 宮坂「Albert Mansbridge と W.E.A. (その 2)」、17 頁。
- (31) 香川正弘「社会教育史研究の方法——イギリス成人教育史をめぐって」『日本社会教育学会紀要』12 (1976 年 6 月)、7-11 頁。
- (32) 宮坂「生涯学習の遺産」、10 頁。
- (33) See 'Endowment Fund for University Extension Lecturers', pp. 12-13, in *Oxford University Extension Lectures, Report of a Conference in the Examination Schools, Oxford of Representatives of the Local Committee, April 20 & 21, 1887* (Oxford: At the Clarendon Press, 1887). 宮坂さんは、ベリオール・カレッジのハドソン・ショー師の成人教育観がマンズブリッジに継承された、と書いている。宮坂広作『英国成人教育史の研究 II』、50-51 頁。
- (34) ベーコン『学問の進歩』服部英次郎・多田英治訳 (岩波文庫、2012 年；香川正弘「17 世紀イギリスの科学革命と王立協会の成人教育への影響 (1)」『生涯学習・社会教育研究ジャーナル』9 (2018 年)、141-152 頁参照。
- (35) Oxford University Commission. *Report of Her Majesty's Commissioners appointed to Inquire into the State, Discipline, Studies, and Revenues of the University and Colleges of Oxford: together with the Evidence and an Appendix* (London: Her Majesty's Stationery Office, 1852). [東京帝國大學図書印]。この報告書は、1845 年にオックスフォード運動が突然に終わり、その直後から大学改革の論議を受けて、政府が王立委員会を設置した。この動きに反発して、W. シューエルが大学宛てに出した大学拡張提案が有名であるが、シューエルだけでなく、調査委員会に対してオックスフォードの大学関係者から 36 人も University Extension の意見が出された。この報告書を精読したことが、大学教育改革の観点から大学拡張を考えさせることになった。香川正弘「W. シューアルの大学拡張提案に関する覚書」『佐賀大学教育学部論文集』27 (1979)、19-42 頁。
- (36) スチュアートについての単独論文はなかったが、女性教育、女性運動、大学拡張、工学教育の単行本や未公刊論文では、スチュアートに一章分を宛てている著作はいくつもあつた。
- (37) Paul McHugh, 'James Stuart: Engineering, Philanthropy and Radical Politics', Richard Mason, ed., *Cambridge Minds* (Cambridge: Cambridge University Press, 1994), pp. 100-109. 現在では、D.N.B. に'James Stuart'は掲載されている。
- (38) Letters of J. M. Slaymakers to Mr. Kagawa, 29th July 1971; 4th November 1971. 本文の情報は、一部紛失した書簡を思い出して書いている。
- (39) 香川正弘「イギリスの大学における構外教育の実態 (I)」「同 (II)」『佐賀大学教学

- 部研究論文集』25 (II) (1978 年 8 月) 49—72 頁 ; 同 26 (II) (1979 年 8 月) 73-96 頁。
- (40) 宮坂広作「茫たり交遊四十年」『生涯学習フォーラム』10 (2008 年 9 月)、183 頁。
- (41) 宮坂「生涯学習の遺産発掘」、6 頁。
- (42) J.G. クラウザー『産業革命期の科学者たち』鎮目恭夫訳 (岩波書店、1964 年)、17 頁。
- (43) 香川正弘・宮坂広作、315 頁。
- (44) Reconstructed map of Portsmouth, showing public-transport routes and the homes of tutorial-class students, 1909-10 and 1912-13, in *Records of University Adult Education 1886-1939: A Calendar* compiled by Edwin Welch (Portsmouth: The City of Portsmouth, 1985), p.xxxii.
- (45) W.T. Layton のクラスの記録は、*ibid.*, pp. 81-86; C.K. Webster のクラスの記録は、*ibid.*, pp. 102-106 に詳細に掲載されている。
- (46) 宮坂「生涯学習の遺産発掘」、5 頁。
- (47) 宮坂広作「Albert Manbridge と初期 W.E.A. (その 2)」、18 頁。
- (48) 真野典雄・香川正弘「社会教育史研究の方法——イギリス成人教育史をめぐって」、*日本社会教育学会紀要*』12 (1976 年) 6 月、1-11 頁。
- (49) 宮坂『額の汗を野にそそぎ』、26 頁。
- (50) 香川正弘「A. マンスブリッジの W.E.A. 設立提案」『佐賀大学教育学部研究論文集』24 (II) (1976 年 8 月)、51-64 頁。
- (51) Edwin Welch, 'The London Society for the Extension of University Teaching, 1875-1902', *Guildhall Studies in London History*, III-1 (October 1977), p. 55.
- (52) See Elizabeth Leedham-Green, *A Concise History of the University of Cambridge* (Cambridge: Cambridge University Press, 1996).
- (53) 宮坂『英国成人教育史の研究 II』、56—57 頁。
- (54) 香川正弘「ある労働組合所蔵の労働者教育資料コレクション、1886—1975 年」『UEJ ジャーナル』8 (2012 年 10 月)、24—28 ; 同「労働者教育パンフレット・コレクション (1881—1975 年) の一覧」、前掲誌、1 (2012 年 12 月)、7—29 頁。
- (55) 全国社会科学振興協会は、ヴィクトリア朝のリベラル派が結集して社会改良を考える重要な拠点であった。Cf. Lawrence Ritt, *The Victorian Conscience in Action: The National Association for the Promotion of Social Science, 1857—1886*, Ph.D. dissertation in the Faculty of Political Science, Columbia University, 1959. 一橋大学所蔵の *Transactions of the National Association for the Promotion of Social Science* は、昭和 9 年 1 月 22 日村瀬文庫代表藤本孝太郎ヨリ寄贈と記されている。
現在、このトランザクションは、HATHI TRUST Digital Library によりネット上で読むことができる。 <https://catalog.hathitrust.org/Record/010307859>
- (56) James Stuart, 'On the work of the Universities in higher Education', *Transactions of the National Association for the Promotion of Social Science 1871* (1872), 372-376 ; 香川正弘「大学拡張の原点——スチュアートの大学拡張構想 (II)」『上智大学教育学論集』27 (1992)、2—7 頁。
- (57) ケンブリッジの「使徒会」は、先輩から最優秀の在校生が選ばれて会員となった。R. ディーコンによると、この会は厳格な秘密会であるが、大西洋の両側で非常に大きな影

響力を発揮し、「政府から芸術まで、哲学から政治学まで、科学から医学まで、あらゆる分野において、かなりのものであった」と述べている。リチャード・ディーコン『ケンブリッジのエリートたち』橋口稔訳（晶文社、1988年）、9-10頁。会員番号162番のJ. スチュアートは、大学拡張の問題をここで検討してもらい、講師や指導層の人材を多くリクルートした。Paul Levy, *Moore: G.E. Moore and the Cambridge Apostles* (Oxford: Oxford University Press, 1981), 85-88.

- (58) Stuart Marriott, 'Dr Welch on Oxford and University Extension: A Critical Note', with A Rejoinder by Edwin Welch, *Studies in Adult Education*, 11 (I) (April 1979), 12-19.
- (59) 宮坂「Albert Mansbridge と初期 W.E.A.(その2)」、19頁。
- (60) 宮坂「Albert Mansbridge と初期 W.E.A.(その1)」、20頁。
- (61) 宮坂「Albert Mansbridge と初期 W.E.A (その2)」。18頁。
- (62) 宮坂「わが師はなにわさを、なしたまいしか」、75-76頁。
- (63) 宮坂「額の汗を野にそそぎ」。24頁。
- (64) 小川利夫・島田修一編、397-411頁。
- (65) 宮坂「生涯学習の遺産発掘」、8頁。若手の歴史学者では、G. Brown や R. Fieldhouse の名前をあげている。
- (66) 宮坂『英国成人教育史の研究 I』、379頁。
- (67) 宮坂「生涯学習の遺産発掘」、8頁。
- (68) M.D.スティーブンス『イギリス教育学者の見た日本の教育』上杉孝實・江坂正巳訳（新世社、1993年）、21頁；宮坂『英国成人教育史の研究 I』、379-380頁。
- (69) 宮坂『英国成人教育史の研究 I』、378頁；同「Albert Mansbridge と初期 W.E.A.(その2)」、20頁。
- (70) 宮坂、上掲論文、6頁。
- (71) 宮坂、上掲書、378頁。
- (72) 宮坂さんは、日本でよく引用される B. Simon, *Education and the Labour Movement 1870-1920* (Lawrence & Wishart, 1965) の本で労働者教育を述べたところを読まれて、引用文献からみて、Ruskin College Archives にアプローチした形跡がないと指摘されている。宮坂広作「成人教育における「学習の自由」の問題——ラスキン・カレッジにおける「学生叛乱」の教育的意義」『東京大学教育学部紀要』31（1991年）、289頁注30）。宮坂さんのこの指摘は、わが国での生涯教育史の研究でも、アーカイブを訪ねて原資料をあたねばならないという後輩への忠告を受け止めたい。イギリス研究でアーカイブを訪ねれば、相手は歴史学を修めたアーカイヴィストが対応してくる。大英図書館には一般研究者が入館するための面接がある、MSS Room（マニユスクリプト室）へ入るためには、また面接を受けねばならない。私の前にいた女性はボストンの大学の教授で、面接官に「何をお探しですか」と聞かれて、「ルネサンス美術の資料を見たくて来ました」というと、理由の説明もなく「Sorry! Sorry!」の連発で相手にしてもらえず帰らされた。私の場合は、「グラッドストーン文書の大学改革の文書を探しに来ました」というと、どうぞ、どうぞ、とすぐにパスできた。
- (73) 宮坂「生涯学習の遺産発掘」、6頁。
- (74) 同上論文、7頁。

- (75) 宮坂さんが読まれた議事録のタイトルは、University of Oxford, Minutes of the Tutorial Committees of the Oxford University Extension Delegacy である。第1回委員会の議事録は、写真で提示しておいた。チュートリアル・クラスがどのように新鮮味があったのかを研究したいと思って、ケンブリッジ、ロンドン、マンチェスターなどの大学チュートリアル・クラスの年報等も集めたが、オックスフォードの場合では、次の史料も必読となる。忘れないように書いておく。

[For the Hebdomadal Council only.]

Reply made by the Hebdomadal Council to the University Extension Delegacy, June 17, 1912.

Report of Committee on Applications by Extension Delegacy.

Oxford University Tutorial Classes Committee: Replies to Queries of the Committee of the Hebdomadal Council. April, 1912.

Appendix to Question 12: What Workpeople Think of The University

(Signed) C.W. Bowerman, J. Mactavish, A. Mansbridge, 15th April, 1912.

Oxford University Extension Delegacy. Tutorial Classes Committee. *Annual Reports on the Work of the Classes for the Years, 1909-1920.*

- (76) 上掲論文、7 頁。
- (77) 宮坂『英国成人教育史の研究 I』、219 頁。G.P.M. Millar については、*International Biography of Adult Education*, ed. by J.E. Thomas and B. Elsey (Nottingham: Department of Adult Education, University of Nottingham, 1985) にも取りあげられていない。彼の生涯の業績を知るには、次の文献が参考になる。John McIlroy, 'J.P.M. Millar: An Appreciation', *Studies in the Education of Adults*, 22 (1) (April 1990), 113-114.
- (78) 上掲論文、6-7 頁。
- (79) 同上論文、7 頁。
- (80) 同上論文、3 頁。
- (81) 宮坂広作「近代日本における労働者教育の遺産——とくに大学の関与と労働学校について」『山梨学院生涯学習センター研究報告』3(1998年3月)、29 頁。
- (82) 相庭和彦「宮坂広作編「生涯学習の遺産——近代日本社会教育史論」(明石書店)、2004 を読む」『山梨学院生涯学習センター研究報告』27(2014年2月)、73 頁。
- (83) スチュアートは、大学拡張をケンブリッジ大学にアプローチする頃、協同組合逍遙大学提案を行っている。J. Stuart, 'The English Universities and National Education', *Cooperative News*, July 20th, 1872.
- (84) Workers' Educational Association, *Annual Report, 1904-1914*. 香川蔵書。宮坂先生の論文に活用してもらった。
- (85) 宮坂『英国成人教育史の研究 I』、51 頁の注 (1)。
- (86) 宮坂「わが師はなにわざを、なしたまいしか」、68 頁。
- (87) 宮原『宮原誠一教育論集』2, 402 頁。
- (88) 同上、417 頁。
- (89) 宮坂「わが師はなにわざを、なしたまいしか」、56 頁。
- (90) P.G. Burbridge, *Cambridge Authors' and Printers' Guides, IV, Notes and References* (London: The Syndics of The Cambridge University Press. n.d.).

- (91) スマイルズ『西国立志編』中村正直訳（講談社学術文庫 原版明治4年 1981年）416頁
- (92) 西岡幹雄『マーシャル研究』（晃洋書房、1997年）；同「英米の正統派経済学と大学拡張運動」『経済学論叢』50（2）（1998年9月）、91－164頁。
- (93) 西岡『マーシャル研究』、89頁。
- (94) 同上書、90頁。
- (95) ロンドン大学教育拡張協会の年報に出ているフォックスウェルの講座は次の通りである。
年度、地方センター名、講師名、所属（出典）
1879 Hampstead, 'Political Economy',
H.S. Foxwell, M.A., Fellow of St. John's College, Cambridge'
London Society for the Extension of University Teaching, *Report of the Council*,
1880, p.8,)
1881 Tower Hamlets, 'Political Economy',
H.S. Foxwell, M.A., &c. (*Report of the Council*, 1881, p. 8.)
この講座の終わりに行われる最終試験の試験委員は A.Toynbee で、評価は次に載っている。
Ibid., p.5.
1882 Poplar, 'Political Economy',
Examiner, H.S. Foxwell, Professor [of University College]
(*Report of the Council* 1882, p.10.)
- (96) ジェイムズ・スチュアートがフォックスウェルに宛てて出した書簡（Letter[4] 1887/08/05）、A.マーシャルのフォックスウェルへの書簡（Letter[5], 1887/09/9）、益田孝のフォックスウェルへの書簡（Letter [6], 1887/09/06. [7] 1887/09/06）が次の資料紹介に載っている。井上琢智「H.S. フォックスウェル文書と日本——末松謙澄・益田孝・添田壽一書簡」『経済学論究』68（4）（2015年3月）、113－124頁。なお、井上琢智によれば、スチュアートは日本政府から依頼を受けたというが、スチュアートに接触した日本政府関係者が誰であるかは不明という。同上論文、118頁。
- (97) 井上「H.S. フォックスウェル文書と日本」、123頁。
- (98) フォックスウェル文書については、井上琢智の「フォックスウェル文書に見る世界的な知の交流——経済学を中心に」が詳しい。『時計台』(84)（2014年4月）、4－13頁。
- (99) 井上「H.S. フォックスウェル文書と日本」、132頁。

< 写真のキャプション等 >

- 写真1 第2回「宮坂広作」学習会案内。2019年9月16日。
- 写真2 Archivist, Dr. Edwin Welch, at Yellowknife, Canada. 香川撮影。
- 写真3 河野辰三先生、1981年、香川撮影。
- 写真4 Portrait of James Stuart, ケンブリッジ大学スチュアートハウス所蔵。1881年。
- 写真5 Mr. Stuart's Lectures (Syllabus), October 10, 1867. (ウェルチ博士提供)
- 写真6 Letter of Professor M. Stephens to the Author, October 2nd, 1978.
- 写真7 1909年度及び1912年度のポーツマスでのチュートリアル・クラス受講生の住所地図
- 写真8 イギリスから寄贈された雑誌に貼られている贈呈票。東京大学総合図書館。
- 写真9 Oxford University Tutorial Classes Committee, Minutes of the First Meeting,

November 14th, 1908. 香川所蔵。

写真 10 *A Plea for a Labour College for Scotland*, 1916. (宮坂広作遺品)

写真 11 J.P.M. Millar and J.Lowe, *The Labour College Movement*, n.d. (jacket cover),
香川所蔵。

写真 12 Portrait of A. Mansbridge, *The Trodden Road*, 1940, frontispiece. 香川所蔵。

写真 13 W.E.A. *First Annual Report*, 1904. title page. 香川所蔵。

香川 正弘 (かがわ まさひろ)

1942 年、広島市生まれ。広島大学大学院教育学研究科博士課程単位取得中途退学、教育学博士。上智大学名誉教授、全日本大学開放推進機構理事長、コミュニティ・アカデミー上臈代表。